

第 9 回 日韓 3 女子大学交流合同シンポジウム 参加報告書

実施期間:2018 年 11 月 20 日～22 日

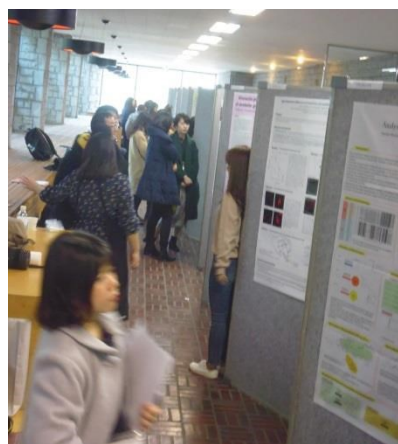
実施場所:大韓民国梨花女子大学校キャンパス

第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加

2018年11月20日から22日まで、韓国の梨花女子大学校において、梨花女子大学校と日本女子大学および本学の3大学の理系学生の交流を目的とした第9回「日韓3女子大学交流合同シンポジウム」が開催されました。本学からは、文部科学省特別経費「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダーシップ論の発信」事業の支援を受けて、19名の大学院生および学部生、5名の教員が参加しました。シンポジウムでは、各大学から参加した学生が研究内容や研究成果について、英語で口頭とポスターで発表するとともに、各大学の教員代表から4件の特別講演がありました。本学からの随行教員として、過去にも数回参加している工藤和恵准教授に今回のシンポジウムの様子について報告してもらいました。



参加者集合写真



ポスター発表の様子

工藤和恵准教授の報告

工藤 和恵

お茶の水女子大学 基幹研究院 自然科学系
准教授（理学部情報科学科）

理系学生の英語による研究発表能力の鍛錬、海外での研究会参加の訓練、および日韓女子大学の友好関係構築を目的として、日本女子大学、梨花女子大学校、および本学の理系学生（学部生および大学院生）が、合同シンポジウムを毎年開催している。このシンポジウムは 2000 年に始まり、開催場所を交互に変えながら数年間続けられたが、その後数年間の中断があり、2010 年から新たな形で再開された。それ以降は毎年梨花女子大学校での開催が続いている。再開されてから 9 回目の本年度は、11 月 20 日～22 日の 3 日間、本学から学部生および大学院生 19 名、教員 5 名の総計 24 名で韓国梨花女子大学校を訪れた。日本女子大からも同程度の人数の参加があった。大人数での訪問となっが、全体として大きな問題もなくシンポジウムを開催することができた。毎年のことながら、梨花女子大の準備と運営に対するご努力に、感謝している。

初日は教員による基調講演と、その後に歓迎会、2 日目は数学・統計学、物理学・応用科学、化学・ナノサイエンス、生命科学・薬学の 4 つのセッションにわかれた口頭発表および教員による基調講演、3 日目はポスターセッションがおこなわれた。梨花女子大の参加者は、学期中ということもあり、全日程を通しの参加は難しかったようだが、できるだけ都合をつけて参加しているように見受けられた。そのため時間帯によっては聴衆が少ない分野があったが、時間が長引くほど活発な議論が交わされた分野もあった。第 3 日目のポスター発表では、日韓の学生および教員が各自のポスターの前で議論している様子が、あちらこちらで見受けられた。

本シンポジウムは、学生間の交流と各自の研究を英語で他分野の研究者に紹介することを目標としてきた。本学の学生たちは、10 月から英語プレゼンテーションの授業を受講して発表練習を行っており、口頭発表での質疑応答ができるようになっていた。前年度と同じく、今年度もベスト発表賞が各大学および各分野から表彰された。お茶大の受賞者は、山本百合、富澤英香、安田紹子、新倉梨加の 4 名だった。今後の励みになれば幸いである。学生たちにとっては、梨花女子大および日本女子大の学生との交流、およびソウルでの見聞から得たものは大きかったと思う。この経験が、学生たちの今後の研究生活に活かされ、将来を考える良い材料になることを願っている。来年度は東京で開催することが検討されている。相互訪問の実現により、今後ますます本活動が発展することを期待している。

参加学生

派遣学生	所属	学年	指導教員
荒井 咲紀	ライフサイエンス専攻(生命科学)	M2	加藤 美砂子
渡辺 華子	ライフサイエンス専攻(生命科学)	M2	作田 正明
大石 佑子	ライフサイエンス専攻(生命科学)	M1	宮本 泰則
鈴木 志保	ライフサイエンス専攻(食品栄養科学)	M2	村田 容常
森島 佑美	数学科	B4	萩田 真理子
経澤 和見	物理学科	B4	森川 雅博
新井 幸	物理学科	B4	森川 雅博
高橋さくら	理学専攻(物理科学)	M1	森川 雅博
川本麻祐子	生物学科	B4	近藤 るみ
中村 文花	生物学科	B4	近藤 るみ
片桐 沙紀	生物学科	B4	由良 敬
安田 紹子	理学専攻(化学・生物化学)	M1	相川 京子
富澤 英香	理学専攻(化学・生物化学)	M2	近藤 敏啓
小西史香	理学専攻(化学・生物化学)	M1	棚谷 綾
朴 昭泳	理学専攻(化学・生物化学)	M2	棚谷 綾
千田 萌生	理学専攻(化学・生物化学)	M2	山田 眞二
山本 百合	理学専攻(情報科学)	M2	小口 正人
新倉 梨加	人間・環境科学科	B4	元岡 展久
木村 文	生活工学共同専攻	D1	元岡 展久

第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 荒井 咲紀

所 属(Affiliation): ライフサイエンス専攻 生命科学コース

(指導教員(supervisor): 加藤 美砂子教授)

発 表(Presentation): The functional analysis of diacylglycerol acyltransferase (DGAT) in *Coccothyrax* sp. strain Obi

このシンポジウムに参加して、得たことは二つあります。

一つ目は、英語を話す度胸です。英語が苦手なりに挑戦し、堂々と発表できたという経験は、今後の私の人生の糧になると思います。

実は私は学部一二年での必修の英語の授業のときから、英語を流暢に操る周囲の同級生に圧倒され、自らのスピーキング能力について勝手に劣等感を覚えていました。その気持ちがバネになって英語を学ぼうとする方向へ向かえば良かったのですが、比較的得意なリーディングへ逃げてしまったり、英語が必要なシーンもその場をただ切り抜けようとするばかりで、ある程度の能力でなんとごまかしたりして、結局すべてが一時的なものであったため、結果として何も身に付かないまま気付けば学生最後の年になっていました。そこで、人前で英語を話す機会を持つことを通して、英語に対する苦手意識を断ち切るきっかけにしたいという思いで、指導教官の先生からの後押しもあり、シンポジウムに参加する決意をしました。



準備や練習のための時間が大学から提供されており、そのことは私にとって非常に心強かったのと同時に、有意義なものとなりました。シンポジウムの参加者は発表準備ために大学内で開講されている講義を受講することが慣例となっています。私はそれを活用して、英語のプレゼンテーション方法を、演習を通して一ヶ月かけて身につけました。このシンポジウムは理系学生全般のためのものなので、専門家ばかりが集まる学会とは異なります。したがって、自身の専門とは異なる学生や先生方にも分かるように「伝える」という努力が一層大切になります。独りよがりの発表にならないようにするためにも、授業で他の専攻の学生からの率直な意見を受けることは、自分のプレゼンテーションをブラッシュアップする上で大変貴重なものでした。

そして何より、授業中先生が何度も仰っていた「Don't read!!」という言葉のおかげで私は成長できたと思っています。原稿を見ないで、ある程度の時間英語を人前で話そうと思うと、どんなにあがいても自分の英語のスキルが露呈してしまいます。だからこそ、今の自分のレベルに向き合うことができました。次回の練習ではもっと上手に話せるようになるという気持ちを持つことで、自然と他人を気にすることは無くなり、スピーキング能力への劣等感に起因する恥ずかしさも和らいできました。

練習に練習を重ね臨んだプレゼンテーション当日も、適度な緊張感は持ちつつも、自分がこれまでやってきた研究を他の人に発表できる喜びを感じながら、行うことができたので、私にとってこのシンポジウムはチャレンジングな参加でしたが、ここで得た経験によって苦手な英語に対し少し自信がつけました。

二つ目は、このシンポジウムを通じて知り合った友人です。専攻の生命科学に限らず、様々な分野の発表を聞くことで、自分の視野が限られたところのみに向いていたことに気付かされました。さらに、韓国最大級的女子大を見学させていただいたり、自分と同年代の学生がそれぞれの研究を頑張っている姿に触れたりすることで、自らの研究へのモチベーショ

ンにもつながりました。もう少し梨花女子大の学生と交流の機会を積極的に作ればよかったという後悔はありますが、このシンポジウムを通じて知り合うことができた人がいるということ、シンポジウムの合間に街中へ繰り出し、ソウル近郊の雰囲気を生で体感できたということ、現地の人と交流ができたということ、全てが私にとって素晴らしく貴重なものになりました。

このようなシンポジウムを企画・運営してくださった相川先生、工藤先生、発表に関してご指導していただいた指導教官の加藤先生、口頭発表の指導をしていただいたサビン先生をはじめ、引率してくださった先生方、温かく私たちを迎えてくださった梨花女子大学の先生方や学生の皆様、全ての方々に心より感謝いたします。ありがとうございました。

第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 渡辺 華子

所 属(Affiliation): ライフサイエンス専攻生命科学コース
(指導教員(supervisor): 作田 正明)

発 表(Presentation): Analysis of DOPA Dioxygenase Function

私はプレゼンテーションの練習のため、そして英語でのコミュニケーションに慣れるために今回のシンポジウムに参加した。

私は説明する事、アピールすることが苦手である。今まで何度か学会等で自分の研究を発表する機会はあったが、単調で面白みのないものになってしまい、改善の仕方もわからなかった。そこでプレゼンテーションの技術を磨き、専門が異なる人にでも面白いと思ってもらえるような発表ができるようになりたいと思い、今回のシンポジウムへの参加を決意した。英語については、英語を使って話をする機会を増やしたいと思っていた。日常的に論文の英語には接するが日常会話や簡単なディスカッションを英語で正確にできるようになるには場数を踏むのが一番だと考えていたので、英語での発表が必要な今回のシンポジウムはいい機会になった。



韓国での発表の前準備は入念に行った。シンポジウム参加者受講必須である英語アカデミックプレゼンテーションの授業では自分の研究を正確かつ面白く、専門外の人にもわかりやすいように工夫して発表をすることを求められたが、最初は日本語ですら説明に苦労した。特に困った部分は言葉の選び方である。自分の専門では普通に使われる言葉でも専門外の人から見ると意味がわからないことが多々あり、どのように言い換えれば専門外の人でもわかるのか手探りの状態だった。しかしクラスの人々の発表を聞いたりアドバイスをもらったりするうち、自分のプレゼンテーションの問題点が見えてくるようになり、毎回の授業後のプレゼンテーションの修正作業に追われるようになった。この作業の中で自分なりに発表の練習を重ねることができ、本番を迎えることが出来た。

韓国では季節柄かなり寒かったが、3日間とも天気恵まれ幸運だった。シンポジウムは初日の懇親会に始まり、発表や雑談を通じて日本女子大、梨花女子大の学生、先生と交流した。初日の懇親会ではサムギョプサルのお店に連れて行ってもらったが、同席した梨花女子大の学生が肉を焼いたり食べ方を教えてくれたりしてとてもありがたかった。彼女たちの専門は数学だったので分野が異なることもあり詳しい研究の話はよくわからなかったが、好きなゲームについてなどの雑談は思いのほか話が弾み、楽しかった。シンポジウム会場の梨花女子大のキャンパスは非常に広く、構内に植えられている木々が紅葉してきれいだった。建物も面白い形のものがあつたこともあり、大学構内を散策するのは楽しかった。時々迷子になったりはしたが、3日間とても快適に過ごすことができた。

2日目の口頭発表は分野ごとに4つのセッションに分かれてはいたが、それでも内容の幅は広がった。普段接することがあまりないような内容の研究発表については理解が難しい点もあつたが考え方や手法の違いに刺激を受け非常に面白かった。発表自体も上手な人が多く、英語の発音や使い方、スライドの作り方などあらゆる面で勉強になった。しかし準備はしっかりしたと思っていた自分の発表はお世辞にもあまりいい出来とは言えず、梨花女子大の先生が質問をしてくださったが意味を取り違えて答えてしまう始末だった。質問の意図を取り違えてしまったことについては休憩時間にもう一度質問を聞きなおすことでリカバリーしたが、質問を受けた時点でその意図を確認していればよかったことなので、大きな反省点である。英語で発表することにいっぱいいっぱいになってしまっていたので、もっと英語を使うことに慣れて気持ちに余裕をもって臨めるよう、英語を使うことに重点を置いた勉強をする必要があると感じた。

3日目のポスター発表は2日目の口頭発表よりも砕けた雰囲気、より気軽に質問がしやすいかった。私のポスターのところには梨花女子大の学生、先生は来なかったので専ら説明は日本語になってしまったが、2日目の発表のリベンジができたかと考えていたので、少し残念だった。梨花女子大には薬学に関する研究が盛んなのか薬学分野のポスターが多くあり、面白かった。その中に自分の研究と使用している手法に近い研究があり、詳しく説明を聞くことができたのは有意義だった。帰国後は早速自分のデータと照らし合わせて説明を受けた手法が適応できるか検討したい。また、他のポスターについて説明を聞いている時に梨花女子大の先生が話に加わって、新たな方向に話が広がったということがあった。自由なコミュニケーションができるポスター発表ならではの楽しみだと思った。その時は結局韓国の伝統的な食材の話になり食堂でそれが食べられることまで教わったが、食堂の場所がよくわからず食べに行けなかったことが心残りである。今度行く機会があったら探してみたい。

また、1日目、2日目は学生の発表の合間にプロフェッサーセッションとしてお茶大、日本女子大、梨花女子大の先生方による講義も開講された。先生方それぞれに研究内容はもちろん発表形式も様々で非常に勉強になった。私は数式を理解することが苦手で数式が出てくる段になるとついていけないことが多かったが、数式を理解することができれば言語関係なく内容を把握することができることに今回気が付いた。今から今回お話を伺った内容について詳しく学ぶのは難しいかもしれないが、勉強しなおして少しはついていけるようになれば見える世界はもっと広がるのかもしれないと思った。

韓国での3日間を通じて、梨花女子大学の先生、学生さんには本当にお世話になった。発表でのことはもちろん、昼ご飯におすすめのお店を教えてもらったり、学内で迷ったときは案内してもらったりと細やかな気遣いをしていただき、とてもありがたかった。梨花女子大の学生さんのようにきめ細やかなサポートができるようになりたいと思った。まずは自分が所属する研究室で後輩のサポートから始めてみようと思う。

今回のシンポジウムでは私にとって多くの課題が残るものだった。発表の内容や話し方については発表が上手いと感じた人のものを参考にもっと工夫の余地があることが分かったので、質疑応答の訓練も含めて友人や先生に協力してもらいながら進めていきたいと思う。しかし自分の新たな課題に気づけたこと、またそれらを改善するためにどうすればいいかやるが見えたのは大きな収穫だった。今回得たことを活かして修士論文もその発表もしっかり仕上げていきたい。

第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 大石 佑子

所 属(Affiliation): ライフサイエンス専攻生命科学コース

(指導教員(supervisor): 宮本 泰則)

発 表(Presentation): Vitronectin promotes axon specification of cerebellar granule cells via $\alpha_v \beta 5$ integrin

今回は B4 から M1 にかけて研究した内容を発表する機会をいただきました。今年の夏に初めて国内のフォーラムに参加した私にとって、英語で自分の研究を発表するのは初めての経験でした。私は M1 ですが、事前の英語プレゼンテーションの時間ではドクターや M2 の先輩も多く、また英語のスキルが高い方も多く、シンポジウムで無事に発表を遂行できるかということがとても不安でした。しかし、授業でプレゼンテーションの方法やコツを幾度も指導していただき、プレゼンテーションを完成させることができました。



さらに、所属している研究室の先輩や、指導教員である宮本泰則先生にも発表を見ていただき、より専門的な視点からご指導をいただいたことで自分の研究とそのプレゼンテーションに関して自信を持つことができました。ポスター発表と口頭発表の両方を準備したのは初めてのことでしたので、そういった意味でも準備は大変だったと感じているのですが、英語の面からも、自分の発表を多くの人に見てもらうためにまとめるという面からも、自分の力をつける機会となりました。特に、普段研究ばかりをしていると自分の研究を客観的に見てその意義や方向性を考えたり、見つめなおしたりすることを忘れてしまいがちです。ですので、今回このシンポジウムで発表を行うにあたって、自分の研究と改めて向き合い直すことができたのは良かったと考えています。実際に、今回の資料をまとめていく中で今後どのような実験が必要なのかという方向性が見えてきましたので、これからそれについて取り組もうとしています。

次に、実際に韓国に行って感じたこと、学んだことを記述します。まず、今回のシンポジウムの会場でもあった梨花女子大学はとても広く、充実した大学でした。日本にはこれほど大規模な女子大学はないので、驚きました。さらに衝撃を受けたのが、学内にあった横断幕の文言です。そこには、「I am not future wife, I am future boss」と書かれており、その意気込み、気概に圧倒されてしまいました。私は強い自立した女性になりたいと考えていますので、このキャッチコピーはずっと忘れないことと思います。

また、韓国の大学生の方が相対的に日本よりも英語レベルが高いことを発表の最中に感じました。私を含めた日本の学生は質疑応答の際に文章を頭の中で組み立てながら話すのでどうしてもたどたどしくなってしまう場面が多く感じましたが、梨花女子大学の学生はよりスムーズに英語を話せていました。やはり、日本で勉強していても英語に触れる機会は論文を読む程度しかなく、なかなか話したり聞いたりする機会がないので実践力に欠ける部分があると考えます。もっと英語を使った授業に参加したり、日頃から英語に触れる機会を増やしていかないといけないと感じました。幸い、私の研究室にはベトナムからの留学生がいますので、今後はもっと彼女と話すことを取り掛かりとして英語で話す・聞くことを自然にできるようにしたいと思っています。

自分の発表に関しては、準備の成果があってきちんと自分の納得できるものになりました。口頭発表では、パワーポイントの発表者ツールが使えないことなど想定外の事態もありましたが、無事に発表を遂行できました。また、もっとも心配していた質疑応答に関しても受け答えをすることができたので安心しています。ただただ心配だった質疑応答ですが、いただいた質問によって自分の実験に足りていなかった視点が見出されました。これは、今後研究を推進していくにあたって大きなアドバンテージとなることと考えています。自信のないこ

とでも挑戦してみることによって思わぬ成果が得られることがあると感じました。しかし、口頭発表に関しては反省すべき点もあります。私の研究はかなり基礎的なもので、専門外の方からすると理解が難しい用語や考え方があっても関わらず、実験結果を説明することを重視してしまい、その背景の説明が不十分であったと考えています。これは、他の学生の発表を聞いている際に感じたことです。やはり、Students Awardを受賞しているような発表は十分に背景が説明されており、聴くひとにより配慮された設計のプレゼンテーションになっていました。私は自分の視点から離れられず、専門外の方にとっては親切でない発表をしてしまったのではないかと思います。今後まだ修士課程を修了するまでに発表をする機会が多くあると思いますので、日本語か英語かに関わらず、プレゼンテーションを聞く人の身になって組み立てることについては意識していきたいと考えます。

Biology の他の学生の発表を聞くのもまた大変面白く、勉強になりました。私は研究室の中で実験が完結するような研究をしています、フィールドワークをしている学生もいたりして、同じ生物分野でも普段は聞くことのできないようなトピックを知ることができました。

ポスター発表では、自分の発表に興味を持ってくださる方がいらっしゃったこともとても嬉しかったのですが、何より生物以外の他分野の発表を見ることができたのが興味深かったです。通常の学会だと生物以外の話題に触れることがありませんので、これはこのシンポジウムに特有の素晴らしい点であると感じました。特に驚いたこととして、化学の分野で私と同じ神経細胞と細胞外マトリックスを題材に研究を行なっていた方がいらっしゃったことが挙げられます。私は最終的に生物の体の仕組みの解明を目指しているのですが、その方は体の仕組みを模倣したデバイスを作ることを目標としていて、同じ題材を扱っていても目指すものが違うことも面白く感じられました。お話をしていく中で、同じような点を課題と捉えていたりすることもあり、研究の話題を共有できたのが嬉しく思います。反対に、自分とは違う捉え方をしている部分もあり、それについてお話しするのも面白かったです。実りある交流をすることができ、有意義な時間となりました。

総括として、初めての海外での発表は学びの多いものとなりました。ご支援、ご指導いただいた方々全てにお礼を申し上げたいと思います。この経験を踏まえ、今後も研究に邁進していこうと思います。

第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 鈴木 志保

所 属(Affiliation): ライフサイエンス専攻食品栄養科学コース

(指導教員(supervisor): 村田 容常)

発 表(Presentation): Pyrazines in natto: How are they formed ?

今回のシンポジウムで、初体験のことが3つあった。それは、研究発表をすること、英語で発表すること、他分野が専門の学生・教授と意見を交換し合うことだ。これら3点を中心に、反省をしたいと思う。

1つ目の研究発表については、既に学会に参加している友人も多かった中、自分は初体験で浮いてしまわないか不安だった。しかし、事前の発表練習も兼ねた授業があったおかげで、他の学生のプレゼンテーションから感覚を掴むことができた。自分のプレゼンテーションについては、毎回資料作成に追われてしまい、見る側の視点が欠けていたと思う。今回の準備を通じて、自分の研究をきちんと理解し発表するには相当な時間と労力が必要であることが学べた。今後発表する機会があれば、早めに発表内容の大枠を作り、要点が絞られたスライドを段取り良く作りたい。梨花女子大で行われた発表の本番では、思ったより気楽に発表することができ、15分間を程よいペースで終えることができた。練習の時は早すぎるが多かったので、この点についてはよかったと思う。ただ質問については、先生方からしかもらえなかったのが少し残念だった。これは発表練習の授業でもそうであった。質問は話し手と聞き手がお互いに発表を良いものに高めあうために必要だと思うので、自分も含めてより話し合いやすい雰囲気を作るべきだと反省した。

2つ目の英語で発表することについては、日常会話ではなく、専門分野の発表を分野外の人に分かりやすく伝える事が一番難しかった。専門用語は単語が初耳であるだけでなく、日本語に戻しても理解が難しい。そのため、イラストを添えたり、簡単な英語で説明しなおしたりした。聞き手が理解しているかどうかを確認することが出来なかったのが、この工夫がどれほど貢献したか不明だが、自分の専門用語の理解にはつながったと思う。また質疑応答では、英語の質問に自分が答えることができるのだろうかと不安であった。実際に質問を聞いてみると、自分の研究に関わることであったのもあり無事に理解でき、いい意味で驚いた。しかし回答する場面では、事前に考えていたことではなくその場で文章を考えるため、出したい単語が英語にできず悔しい思いをした。このことに関しては、実際に質問を受けないと文章が作れないので、準備に加えて場数を踏むことも必要なのだろうと感じた。やはり事前に質問をお互いにするべきであったと思う。英語スキルの低さに関して悔しかった点は、他にもいくつかあった。例えば発表中も周りの反応を見て、とっさに言い換えることができれば、より聞き手に寄り添えただろうと思った。また、リスニング力や語彙力がもっとあれば、他の学生の発表もより理解できただろうし、意見や質問ももっとお互いに言い合えたのではないかと思った。

何よりこのシンポジウムの中で一番楽しかった部分は、3つ目の他分野の学生や教授と意見を交換し合ったことだ。食品栄養科学コースとして参加した学生が他にいなかったため、半ば強制的に初めて会う学生・引率の先生方とコミュニケーションをとることになった。そのおかげで他専攻ではどのような実験を行っているのを知ることができ、交友が広まったと思う。初対面であるのにも関わらず優しく接してくれ、共に行動してくれた他専攻のみなさんにはとても感謝している。また、初日の懇親会では梨花女子大の先生方と席が近く、韓国の大学事情や韓国料理の食べ方など様々なことを教えてもらった。例えば、私の研究テーマである納豆は韓国でも食べられるのかと聞いた際、韓国料理に清麴醬(チョングッチャン)という納豆汁があると教えていただいた。それを聞いて、韓国の人でも納豆は

ある程度知られていることを理解したし、発表中にも清麴醬の話を織り交ぜることができた。どのような味なのか興味があったので、最終日の自由行動の際に個人的に食べに行ったが、納豆そのもので驚いた。納豆を通じて清麴醬に出会うことができよかったと思う。最終日のポスターセッションでは、数学科の学生とお互いの研究内容を紹介することができた。2日目の口頭発表では化学の分野の学生が集まって聞いていたので、新鮮で面白い質問をもらえてよかった。一方で残念なところもあった。それは、梨花女子大のみなさんとの交流機会が少なかったことだ。学校内の友人とともに参加しているせいか、お互いにすでにグループができていた。そのため各大学の学生同士で行動した場面がほとんどであった。自分の英語力と勇気がもう少しあれば改善できたかもしれないが、参加学生全員による懇親会の開催があればなお良かったと思う。



反省ではないが、実はもう一つ初体験があった。それは、初めて韓国に訪れたことだ。シンポジウムの3日間は、異国の環境に触れるのに十分な時間であったと思う。文字が全く読めずソウルの知識も全くなかったため、思うように観光はできなかったが、発表前のいい息抜きになった。

このシンポジウムに参加したことで、研究を見つめなおせ、韓国で様々な体験ができた。この2つは、実験を休止してでも参加してよかったと感じられる十分な成果だと思う。社会に出ていない学生のうちにこのような経験が出来てよかったと思うので、今後もこのようなシンポジウムが続いてほしいと思った。

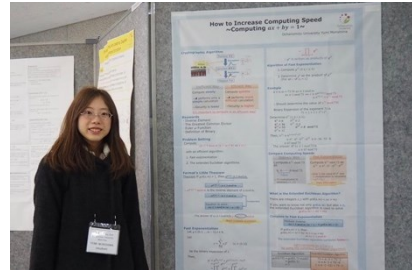
第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 森島 佑美

所 属(Affiliation): 理学部数学科 (指導教員(supervisor): 萩田 真理子)

発 表(Presentation): How to Increase Computing Speed ~Fast Exponentiation~

私はこのシンポジウムに参加するまで、学外での発表経験がありませんでした。学会発表には興味がある一方で、まだ専門分野に限定した学会に参加するには未熟で敷居が高いと感じていました。また、数学科は他学科と比較して学外での発表機会が少なく、なかなかそのような機会を得られずにいました。



このシンポジウムは理系の様々な分野が対象であったため、初めての学外発表の場として良いのではないかと考え参加を決め、派遣させていただくことになりました。英語で発表することには少し抵抗がありましたが、シンポジウムの事前の授業で発表を聞いてもらう機会が何度もあり、他学生の発表も参考にしながら自分の発表の質を徐々に高めることができました。

事前授業では、他学科の学生の前で4回ほど発表を行いました。数学科では当たり前に見える知識や定理が他学科の方にとっては難しいことを改めて知りました。質疑応答でも、予想もしていなかった質問や発表の改善点が出てきて他学科の方に発表内容を理解してもらうことの難しさを痛感しました。また、大学の英語の授業では何度も英語でプレゼンやエッセイを書く機会があったので原稿を書くのは慣れているつもりでしたが、専門分野の発表となると、数学特有の言い回しや専門用語を確認しながら原稿やパワーポイントを作る必要があり、時間が非常にかかりました。

発表内容としては、ゼミで読んでいるテキストの中で他分野の学生にもわかりやすく興味を持ってもらえるような題材を選びました。15分の発表で、他分野の学生にわかりやすくかつ丁寧な説明を心がけた結果、数学に精通している人にとってはかなり簡単な内容になってしまい、テキストの受け売りのようになってしまったことは少し残念です。自分で「自分の発表は面白い！」と自信を持てなかったことが悔しいです。もっとうまい英語での説明を考えられたら、もっと深い内容まで踏み込めたのではないかと思います。他大学の数学科の学生は、もっと高度な内容でかつ自身の研究に直結したような内容を発表していたため、もっと専門的な内容に近づけてもよかったなとも思います。

他の学生や教職員の方々の発表を聞いている際には、英語だと日本語ですぐ理解できることさえ理解に時間がかかることを痛感しました。梨花女子大学の学生は、まるで自国語のように流暢に英語で発表していて驚きました。英語力だけでなくプレゼン能力も高く、これからもっと精進しなくてはいけないと感じました。

このシンポジウムで特に印象深かったのは、ポスター発表と学生同士で親睦を深められたことです。

ポスター発表は初めての経験でしたが、対話形式で内容が進んでいくので説明する側だと相手の理解を確認しながら話を進めることができ、説明を聴く側だとわからないところをその都度解決して理解が深まるので議論が活発になり面白かったです。

他分野の学生も私の説明を聞きに来て下さり、興味を持っていただきました。日本では高校で習う「合同式」が暗号の分野にいかに使われているかを説明したため、「高校で習ったときは合同式が何のためにあるかわからなかったけれど、実際に数学で使われていることが分かり興味深かった」という意見もいただきました。全く違う分野の学生から評価していただいたことは大変嬉しく自信になりました。ポスターの中では、特に工藤先生の「グラフ彩色を

物理学の視点で考える」というのが特に面白かったです。

お茶大生間でも学科の異なる学生同士と深く関わり、有意義な時間を過ごすことができました。お茶大数学科は私1人しか参加していなかったので不安な気持ちもかなりあったのですが、皆さんがとても優しくして下さいました。お茶大の参加学生とはほとんどの方々と話す機会があり、研究内容や研究室の設備、論文を書く際の着眼点についてなど興味深い話を聞くことができました。また、自由時間には建築学を専門とする学生と、故ザハ・ハディド氏がデザインを担当した東大門デザインプラザに行き、建物のどのような所に着目するかなどを聞けて面白かったです。

梨花女子大学と日本女子大学の学生とも懇親会やポスター発表の際にお話することができました。他大学の学生と研究のことや、日本や韓国の文化、趣味などについて話しました。英語を話すことはあまり得意ではないですが、文法を気にせずとにかく意味を伝えようとすることで、会話も徐々に弾んでいきました。

今回のシンポジウムでは、研究内容はそれぞれでしたが発表や他学生との会話を通してたくさん刺激を受けました。まだまだプレゼン能力も未熟であるし、研究分野についてももっとテキストや論文を読んで知識量などを増やしていくことが必要だと感じました。私は来年度からも引き続きお茶大で大学院生として研究を続けていくので、この経験を糧にして今後はより専門的な学会での発表もしていけたら良いなと考えています。

最後に、プレゼンテーションの指導をしてくださったグホ先生、発表内容の相談に乗ってくださった萩田先生・ダハン先生、またこのような貴重な機会をあたえてくださった日韓三大学の先生方、本当にありがとうございました。

第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): Kazumi Tsunezawa

所 属(Affiliation): Physics. (指導教員(supervisor): Masahiro Morikawa)

発 表(Presentation): Vacuum Energy Density in QCD

今回初めて大勢の前で自分の研究内容について発表する機会を得ることができた。韓国へ向かうまでは、より分かりやすく正確な資料を何度も作り直し、英語での発表練習も念入りに行った。私自身海外に行くのが初めてであり、韓国の学生と交流できることを楽しみにしていた。まず、梨花女子大学に着いて一番驚いたのは、構内の敷地が非常に大きくたくさんの学科が存在していることだった。歴史のある大学であるということだったが、外観も内観も美しい建物が多く魅力的だった。庭園も綺麗に整理されており、ちょうど紅葉の季節だったため景観を楽しむことができた。ただ、理学部棟が梨花女子大学の中でも奥の方の高いところにあったため、毎日登校している所属学生たちは大変そうだなと感じた。

1 日目のレセプションパーティでは、日本女子大・お茶の水女子大・梨花女子大の交流を図るためになるべく多くの人と話すように心がけた。特に席が近くなった梨花女子大の学生の一人が日本のサブカルチャーに興味を持っており楽しく会話をすることができた。韓国や日本の文化のこと意外にも、自分たちの研究分野について話して興味深い知見を得ることもできた。完全な英語でのコミュニケーションは初めてだったため、単語の意味がわからなかったり、知っている単語のはずだが発音が普段日本で聞き慣れているものとは違ったりして困難が多かった。しかし、文法が完全に正しくなくても一生懸命伝えようという気持ちを強く持てば意思疎通が可能であることが分かった。研究発表の原稿やスライドにおいては、正しい冠詞や文法を用いることに注意して作成していたが、会話となると気をつける点が変わって来るのだと学んだ。英語以外にも韓国語と日本語の類似点なども話し合うことができ、個人としては非常に充実した1日目を迎えることができた。

2 日目はプロフェッサーセッションから始まり、セクション毎に学生たちの研究発表が行われた。個人的には、もっとセクションに関係なく解放的なプレゼンテーションだと思っていた。そのため、プレゼンテーションには簡易的な表現を用いるように心がけていた。しかし、私の所属していた物理セクションでは物性分野や天体観測分野などの専門の生徒が殆どで、他セクションとの出入りもなかったため想定とは異なっていた。日本女子大学とお茶の水女子大学の学生は念のためにスクリプトを用意してプレゼンテーションに望んでいたのに対して、梨花女子大学の学生はスクリプトを用意せず日常から英語に慣れている様子だったのが印象的だった。どちらもメリットとデメリットがあるように感じた。私は普段から英語を用いることは殆どないため、その場で考えて英語を話すのは難しいことだと感じた。特に質疑応答では質問者が聞きたいことと、発表者の受け取り方が合っているのか不安に思うことがあった。日常会話なら分からない単語も他の単語に置き換えて話すことは比較的容易だが、専門分野になると知識のレベルや内容によって知っていないとはならない専門用語があるという点が難しいと感じた。また、相手の言いたいことが理解できたとしても、自分の言葉でどう表現していいか分からないという状況もあった。そういう状況下で臨機応変に対応できるかどうかは、普段から英語と親しんでいるかによって変わってくるのではないかと思う。自分の発表に関しては、プレゼンテーション自身は何度も練習したため聴衆の方を向いてスムーズに話すことができた。しかし、質疑応答で簡単な質問にはすぐ答えることができたのだが、研究の本質に関わる大事な部分の質問にすぐ対処できなかったのが残念だった。これによって、言語の種類に関係なく自分の研究内容をよく見直すことは重要だということを学んだ。また、近い分野であったとしても他の人の研究内容を15分のプレゼンテーションで完全に理解するのは難しいことだと感じた。なぜその研究をするに至ったのかと言うことや、成果や目的を明確に示すことが分かりやすいプレゼンテーションを作るコツなのだと学んだ。自分が当たり前のように前提にしていることでも、他の人から見て当然であるとは限らないのだと感じた。また、うまく表現できなかったとしても伝えようとする意思を捨てないことが重要だと考えた。日本女子大学や梨花女子大学の物理学科ではどんな

研究をしているのか知ることができ、上手なプレゼンテーションも学ぶことができたので良い機会であった。夜は1日目に仲良くなった他セクションの学生たちと明洞へ行き、露店やプルコギ・牛ユッケなど韓国特有の食べ物を楽しむことができた。食に関しては、日本と比べて辛さが増していることや一人前の量が多いことが印象的だった。

3日目はポスターセッションを行った。廊下に蛇腹状のパネルが並んでおり、いろんなセクションのポスターを見ることができた。数学科の暗号に関するポスターや生物科の遺伝子に関するポスターの説明を受けた。自分の専門分野外の研究だと前提知識が少なく基本的なことをたくさん質問してしまったが、どの学生も丁寧に説明してくれた。所属セクションである物理科のポスターでは、発表時間が限られていたため前日に質問することができなかった点などを詳しく説明してもらい機会となっており、より深く研究内容を知ることができた。自分のポスターに関しても、プレゼンテーションで説明しきれなかった部分を他学生に質問してもらったことができたため嬉しかった。設けられていた2時間は、あっという間に終わってしまい気づけば終わりのセレモニーの時間だった。午後は自由時間で、1日目のレセプションパーティでお勧めしてもらった飲食店や洋服店を巡り、最後に景福宮を訪れた。景福宮の敷地は非常に広く想像以上だった。古い建物なのに色が鮮やかで独特な模様が至る所に入り込んでおり美しかった。今回のシンポジウムのおまけとして、韓国の歴史的文化財に触れることができたことを嬉しく思う。時間があれば梨花女子大学付属の博物館に行きたかったのだが叶わなかったのも、また別の機会に訪れたいと思った。

日韓3女子大学交流合同シンポジウムという貴重な機会を得ることができて本当によかったと感じている。特に、世界でも有数の規模を持つ梨花女子大学を訪れ、その学生たちと触れ合うことができたことを嬉しく思う。韓国で準備をして環境を整えて下さった先生や学生たち、引率を担って下さった先生や、共に議論してくれた学生たちに感謝している。

第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 新井 幸

所 属(Affiliation): 理学部物理学科 (指導教員(supervisor): 森川 雅博)

発 表(Presentation): Scaling law of the cosmic magnetic fields

まず口頭発表についてである。私は物理,応用科学のセッションだったが梨花女子大の学生さんの口頭発表が少なく、また午前中のみだったからか午前中は教室に人が入りきらないほどの人数が聴講しており、議論も活発に行われていたようだった。しかし午後は日本のこれから発表をする学生とその教員と少しだけ梨花女子大の先生が聞きに来てただけで、午前中ほどの議論もできなかった。さらに午前中は時間をあまり測っておらず思う存分議論をしていた印象があったが、午後からは時間もきちんと測るようになり、質疑もそれほど手が上がらなかった。私の発表は午後だったので、自分の研究について積極的な議論ができた午前中の発表者がうらやましいと思った。さらに口頭発表は各セッションに分かれていたが、他のセッションの発表が全く聞けないのは残念だった。理学部の全学科融合と聞いていたので、内容はあまり専門的にならないように配慮したが、逆にセッションで分けてしまうのならもっと専門的な内容も紹介したかった。さらにポスター発表についてである。やはり全体的に圧倒的に日本からの学生の数のほうが多く、ほとんどの場所で日本語のままで議論がされていた。大学ごとに集まって話してしまうのはよくないと思った。しかしポスター発表では梨花女子大の学生さんのポスターの説明を聞いたり、英語,日本語,韓国語を交えての会話やお互いの研究の話なども少しできたので良かったと思う。本当はもっといろいろな口頭発表で聞けなかった他のセッションのポスターも色々見たかったのだが、日本人同士などで一つの話題について話し込んでしまったりして時間が無くなってしまったのが反省点である。ポスター発表は時間が進めば進むほど、一定の場所で話し込んでしまうグループが多かったので、一気に時間をたくさんとるよりは口頭発表と半分ずつで2日目と3日目で分けるとメリハリがあっていいかもしれない。今回のシンポジウム全体として感じたことを述べる。梨花女子大の方々はとても親切で手厚くおもてなししていただいていたがたかった。しかし自分のセッションに梨花女子大の学生さんが少なかったということもあり、専門的なことを英語で話せるチャンスだと思っていたがあまり同じ分野の学生はおらず、他のセッションの学生さんともなるとほぼ関わりがないのが残念だった。懇親会のサムギョプサルはとてもおいしかったが、シンポジウムで発表はしていない学生さんなどが来ていて逆に発表者はいなかったりしたのも残念だった。特別な交流会などを開く必要などはないと思うが、もっと日韓の発表者同士が交流できるようなプログラムが良いと思った。日本の大学2校に対して韓国の大学は1校なのでどうしても日本人の比率が多くなってしまうのは仕方がないが、ほぼ日本人しかいない中で発表して、韓国で開催する必要性をあまり感じなかった。しかし初めて国際的な場所で自分の研究を発表できた、という経験はとても良いものだったと思う。自分の研究を話すための英語を発音に関しても、リスニングに関してももっと練習すべきだと痛感した。日本語で質問されればすぐに答えられるような簡単な質問でも、英語で質問された、ということで緊張してしまったこともあり、スムーズに答えられなかった。日本語の発表であれば、原稿も見ないで話すことができるが、英語の発表だとほとんど原稿に頼ってしまっている部分があって、これは大きな反省点である。やはり出発前の練習が足りなかったのだと思うので、また国際的な場所で発表する機会があるときは、そらんじられるほどに練習したいと思う。そうすれば自分の研究がどのような英語で書かれているのかも頭に叩き込むことができるので質問やポスター発表でも対応できるようになると感じた。国際的な場としてだけでなく、学外で研究発表をする経験も初めてだったので、自分の研究に対して初めて学外の人からの評価をいただいたのは研究の励みになった。私の研究にコメントしてくれたのは日本女子大の先生だったので、日本の学会などで今後お会いする機会もあると思う。そのときまでにもっと議論や自分の理解を進めようという意欲につながった。最後にシンポジウム以外のことについて報告する。私は今回初めての参加だったが、例年12月に開催している

のが今年は 11 月だったということで、気候は日本よりちょっと寒いくらい、と思っていたが想像以上に寒くて驚いた。手袋をもっていかなかったことに後悔した。梨花女子大は世界最大規模の女子大、ということでキャンパス内もかなり広いし、坂がかなりきつかった。様々な韓国の企業が梨花女子大のスポンサーとなっているようで、シンポジウムを行った建物も韓国の企業の名前がついていたし、キャンパス内の映画館なども韓国の企業が出資しているようで、国全体をあげた、という意味でも本当に規模が大きかった。お茶大は門に守衛さんがいて、学生証を見せなければ入れないようになっており閉じた印象があるが、梨花女子大はそんなことはなく、むしろ一般の方が多数出入りしているようで一部観光地のようになっていることに驚いた。さらに印象に残ったのは、お茶大では”女性リーダー”や”女性のキャリア”というようになにかと頭に”女性”がつくが、梨花女子大は全くそんなことはなく、一人の人間として、というところを大事にしているように感じた。キャンパス内には”We are not a wife, we will be a boss.”といった標語が掲げられており、同じ女子大でもお茶大とは違った強いメッセージを感じた。学内でもお茶大だとポスターの色などピンクが多いと思うが、梨花女子大がピンクはあまり使われておらず、あまり女子大であることを強調していない印象だった。また韓国全体の印象としては日本とそう変わらないが、駅の案内や美術館などの公共施設が外国人に対してとても親切だと思った。公共施設のみならず、大学の学食の券売機も韓国語、英語、中国語、日本語に対応していたので問題なくスンドゥブチゲを頼むことができた。電車の乗り換えがわからず、道を聞いたときは相手の方が日本語を話してくれた。梨花女子大でも日本語学科の学生さんのお手伝いの方が日本語を話してくれたりしたので、日本人の韓国語の認知度よりも韓国人の日本語の認知度のほうが高いという印象だった。まとめとしては、韓国の学生さんとそれほど話せなかったのが心残りではあるが、初めて学外、国際的な場所で研究発表などの活動を行えたことは、今後に生かせる本当に良い経験ができた。海外の女子大というのもお茶大とはまた文化が異なっているので興味深く、刺激を受けた。



第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告 : Symposium Report

参加者名(Name): 高橋 さくら (Takahashi Sakura)

所 属(Affiliation): 理学専攻物理科学コース (指導教員(supervisor): 森川雅博)

発 表(Presentation): Super-Massive Black Hole Formation from Bose Einstein Condensate Collapse.

今回、私は英語での口頭発表と研究に関する英語での交流を目的として日韓三女子大学合同シンポジウムの参加を決めました。今まで日本語での研究は何回か経験してきましたが、すべて自分の専門分野と同じ分野を研究している方たちの前での発表だったので、このシンポジウムのように専門分野外の方にも分かりやすく説明するというのも目的のひとつでした。私はこのシンポジウムに参加することで、様々な困難を



体験し今後の研究について考える機会を得ることができました。まず、準備の段階でぶつかった困難は2つあります。1つめは、専門分野外の方に分かりやすく伝えるということです。とくに、物理分野は建築と観測機器の分野との合同セッションでしたので、数式ひとつにも、その数式の意味や利用目的を明確に説明する必要がありました。その説明を考えていくと、自分でもちゃんと意味を理解できていないまま先行研究にならって用いていた計算があることに気が付くことができ、より自分の研究について深く考える機会になりました。また、研究の流れをどうしたら分かりやすく説明できるかを考えることで、自分の研究の理論の流れについて見直すこともできました。2つめの困難は、英語での発表資料を準備するということです。スライドやポスターを作り、原稿を考える作業すべてで自分の語学力の低さを痛感しました。また、発表スタイルも日本語での発表の時は何気なくできていた、アイコンタクトや身振り手振り、聴衆の反応を伺いながら落ち着いてゆっくり話すことなどが、英語で発表することになったとたん難しくなりました。原稿も何度も読み込んで、スムーズに話せるようにするといった事前準備がとても大変でした。今後の研究生生活においても英語発表の機会はやってくと思うので、今回準備の大変さを知ることができて、とても参考になりました。

梨花女子大学では、初日にプロフェッサーセッションが2つありました。私はリスニングには割と自信があったのですが、分野外の説明ですと少し内容が詳しくなただけで聞き取れない単語がたくさん出てきて、スライドを読みながら聞くという難しさがありました。その夜の懇親会では梨花女子大学の学生さん2人とお茶の水女子大学の学生1人と同じテーブルになりました。相手が言っていることは理解できるのですが、なかなか英語で返すことがむずかしく、母国語外でのコミュニケーションの大変さを感じました。また、梨花女子大学の学生さんの英語の発音のきれいに驚きました。とても聞き取りやすく感じました。どうやって英語を練習しているのか聞いたところ、梨花女子大学は交換留学や就学生受け入れを積極的に行っている関係でキャンパス内に様々な国の人がいて日常的に英語で会話する機会が多いと言っていました。私は身近に外国人の方がいないので、日本で日々英語を使うことがありません。したがって、全く英語での会話に慣れていないのだということを痛感し、今後、英語を使う機会をもっと増やしていきたいと思いました。

2日目には、自分の研究発表がありました。そこで感じた困難は、やはり自分の語学力と準備の足りなさです。私は、緊張で覚えたはずの原稿も飛んでしまい、原稿を読みながらの発表になってしまいましたが、同じセッションの発表賞を受賞していた学生さん達は、原稿を見ずに発表していて、「自分の言葉で発表しているな」と感じられる発表で、とても面白い発表でした。その学生さん達のように、自分の言葉で考えて発表している感がないと、なかなか興味を持ってもらいづらいということも分かっていたのですが、そのためには、もっと多くの練習が必要だったと感じました。また、いくつか質問が出た際に、返答したいことがあっても、とっさに英語で返すことは難しかったです。それは、1日目に感じたように日々英語をつ

かい、慣れている必要があると考えました。また、発表の時に出了た相対性理論と凝縮の転移温度の関係は、今後研究していきたいと思います。

3 日目のポスター発表では、日本女子大学の学生さんで、宇宙の電波観測機器のノイズ補正の方法を研究している方が来てくださり、いろいろ議論することができました。日本語での議論でしたので、言葉につまることはありませんでしたが、分野が多少異なるため、簡単に説明するのは少し大変でした。しかし、自分では気にしていなかった素朴な疑問を聞くことができ、研究のヒントになりそうな議論を行うことができました。また、自分は生物や数学などの異なるセッションのポスターも聞きにいきました。いろいろなポスターがあり、分かりやすく興味を引くポスターのデザインをいろいろ見ることができました。次にポスターを作るときには、参考にしたいと思います。

全日程での自由時間は明洞にいて食事や買い物をしましたが、ほとんどの人が日本語で話していたので、最初目的としていた英語でのコミュニケーションは達成できませんでしたが、学部生のころにサマースクールで会った韓国の友達とも会うことができ充実した自由時間を過ごすことができました。

今回のシンポジウムでは、国際学会で発表することの大変さ、自分の語学力の足りなさ、を体験することができ改めて、語学の勉強へのモチベーションを上げることができました。また、自分の研究の流れを見直すいい機会にもなり、今後の方針を決める際にとっても参考になりそうです。今後またこういう機会があったら積極的に参加していきたいと考えています。

第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 川本 麻祐子

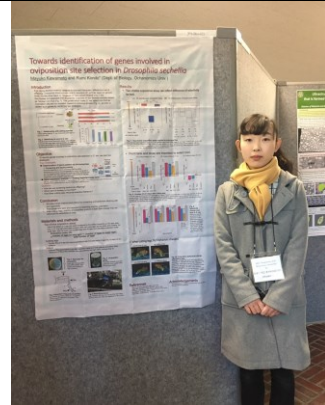
所 属(Affiliation): 理学部生物学科 (指導教員(supervisor): 近藤 るみ)

発 表(Presentation): Towards identification of genes involved in oviposition site selection in *Drosophila sechellia*

11月20日から22日の3日間にわたって韓国の梨花女子大学で開催された、日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加した。英語での発表が未経験であること、そして海外での実施であることから躊躇もあったが、だからこそ良い経験になると思い参加を決定した。2日目の口頭発表と3日目午前中のポスター発表を中心に、様々な分野の先生方のレクチャーを聞いたり、レセプションの中で他大学の学生と交流する機会を得た。自由時間にはソウル近辺を観光し、韓国の文化に触れることができた。

シンポジウムでの一番の課題は自分の発表であった。口頭発表に関しては、10月から1か月間の授業の中で数回に分けてスライドを作成し、発表練習を行った。普段使う機会の少ない英語での発表であるうえ、人前に立つことが苦手な私にとって、複数回練習ができたことは不安の解消につながった。授業後には先生や他の受講者からの評価を受け取ることができ、改善点が分かりやすかった。また、授業では多くの参加者の練習を聞くことができた。スライドの構成や話し方、他分野の専門でも理解のしやすい説明方法など、大変参考になった。本番では不慣れな機器に戸惑った部分もあったが、比較的落ち着いて発表できたように思う。練習の成果が発揮できたと感じる一方で、多くの反省点も見つかった。最も大きな課題は質疑応答であった。自分の考えを咄嗟に英語でまとめて話すことが難しく、一言回答をするために非常に時間がかかってしまった。英語での会話に慣れていないことはもちろんであるが、予め質問を予想し、どのように回答するか考えておくべきであったと感じている。今回は特に、同じ研究室の所属で、類似した内容の発表者に続けての発表であった。案の定前の発表との関連を質問されたため、研究の共通点、相違点について事前にまとめておくべきであった。発表練習の授業でも質疑応答の時間が設けられていたが、実際に質問を受けたことはほとんどなかった。英語で回答する難しさを十分に経験していなかったことも問題であったように思う。自分からも他の発表者に積極的に質問をし、意見を交換しやすい空気をつくることができればよかったと感じている。本番では発表に対して質問するどころか、内容を理解することすら難しかった。前日のレセプションで日常会話程度であればついていくことができると分かっていたが、英語を聞き取ることと専門的な内容を理解することを並行するには力が及ばなかった。学部では専門科目の講義を英語で受けることがなく、こういった機会が初めてであったことを思えば当然であるかもしれない。学問の世界で必要となるのは、単純な英語力だけではないことがよく分かった。リスニング力の至らない中で、理解の助けとなったのがスライドである。スピーチが完全に聞き取れなくても、目で追っていくことで情報を補完できるようなスライドが見受けられた。分かりやすいスライド作りの重要性を実感した。

ポスターは学科の中間発表で一度作成していたため、それを基に少し手を加え、英語に翻訳する作業を行った。一から作ることを思えば簡単ではあったが、英語に翻訳するだけでも苦勞した。研究室の先生に何度か校正をお願いして完成に至った。文法が正しい文章をつくることに精一杯で、より分かりやすく一般的な言い回しを使いこなすほどの経験がないことを痛感した。分野ごとに分かれていた口頭発表に対し、ポスター発表はすべての参加者で合同であった。他の分野のポスターを見る機会はほとんどないので、様々な様式が見られて新鮮であった。ここでは梨花女子大学の物理を専門とする先生に説明をする機会があった。ポスターの内容をそのまま読めばよいと考えていたが、文章のつながりや補足説明を



付けられず、うまく伝えることができなかった。自分が英語で臨機応変に対応できないことを自覚し、どのように話すかも考えておくべきであった。また、日本人学生同士でも発表しあうことがあった。当然のように日本語での会話になってしまったが、以前よりも分かりやすく説明できたように感じる。口頭発表で専門外の聴衆を意識し、理解しやすい言葉選びを心掛けた成果ではないかと思う。英語の使用を目的に思っていた口頭発表が、こういった形で生きるとは思わず意外であった。

このシンポジウムは、私にとって初めて韓国を訪問する機会となり、プログラムの時間外にも新鮮な経験が得られた。正直なところ、私は韓国にあまり関心がなかったため、何が有名なのか、どのような土地であるのかを知らなかった。その国に独特の雰囲気があることを予想していたため、実際に訪れてみると、地下鉄や街並みが日本と大差ないことに驚いた。しかし街中で目につく文字、そして聞こえてくる言葉は韓国語である。特に不自由はなかったものの、一切韓国語の分からない私にとっては少し心細く感じるとともに、海外であることを実感させられた。料理も韓国特有のものを味わうことができた。調理方法や味付けが独特でありながら、主食が米や麺であること、そして箸を使って食べることから違和感が少なく、食べやすい印象であった。梨花女子大学の学生や先生方は日本に対して友好的で、日本への旅行時の思い出話を聞くこともしばしばあった。挨拶や感謝など、簡単な日本語をいくつか覚えている人も多いようであった。たとえ片言であっても、そういった言葉を聞くと相手に親しみを感じた。シンポジウムの一番の目的は英語での研究発表であったが、訪れる国やその場所の人々に対して関心を示すことが礼儀であったと感じる。

今回のシンポジウムは英語での研究発表、そして様々な分野の学生と交流する場として非常に有意義であったと感じるとともに、このような機会が得られたことに感謝している。大学院生の参加者がほとんどである中で、研究結果や英語力が未熟な学部生であることを引け目に思うこともあった。しかし、優れた発表を多く聞くことができ、良い刺激を受けた。この経験を今後の研究活動に生かしていきたいと思う。

第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 中村 文花

所 属(Affiliation): 理学部生物学科 (指導教員(supervisor): 近藤 るみ)

発 表(Presentation): Examination of *Drosophila Or85c* on species specific olfactory behavior

11月20~22日に韓国ソウルの梨花女子大学で開催された第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加し、英語での口頭発表とポスター発表を行いました。私は学部4年生ということもあり、自分の研究を英語で発表するという経験は初めてでした。英語が苦手な私にとって今回のシンポジウムへの参加は大きな挑戦でしたが、英語を使う良い機会であるとともに、他の発表者の発表を聞くことはこれから先研究を続ける上での良い刺激になると思い参加を決めました。また一方では、韓国の文化に触れ、現地の方々と交流したいという気持ちもありました。



シンポジウムに向けて授業を受講し、約一ヶ月半スライド作成や発表練習を行いました。毎回発表後にフィードバックをいただき、スライド構成や発音などの修正を行いました。分野の異なる方々に向けて、自分の研究内容を理解してもらうことの難しさを痛感しましたが、改善を重ねながら徐々にスライドを完成させることができました。多くの方々にアドバイスを頂くことで、様々な表現方法を学ぶことができ、良い経験になりました。

シンポジウム初日は、夕食を通しての交流会がありました。夕食の際には、梨花女子大学の学生の方々と積極的にコミュニケーションをとるように努めました。主に英語を使って会話をしましたが、日本語を理解できる学生の方がいらしたため、英語で表現することができない時には通訳をしてくださいました。お話をした梨花女子大学の学生の方々は日本に旅行に来た経験があり、日本の食べ物やアニメが好きということで、会話が弾み非常に楽しい時間を過ごすことができました。また、大学生活のことや、大学周辺のオススメのお店なども教えていただきました。楽しい時間を過ごす中でも英語力の差を感じ、もっと英語が理解でき、話せるように勉強しなくてはいけないと思いました。

二日目は分野ごとに四つのセッションに分かれて口頭発表を行いました。私は、Life and Pharmaceutical Sciences のセッションに参加しました。異なる研究内容の発表を聞く経験はあまりないないので、興味深く楽しかったです。発表の際、梨花女子大学の学生の方々は英語での発表に慣れている様子で、質疑応答もスムーズに行っていました。一方で私は、緊張せず練習通りに発表することは出来たものの、質問に対する受け答えが上手くできずもどかしい気持ちになりました。また、専門外の発表を理解することは難しく、積極的に議論に参加できなかったことに対しても心残りが生じました。口頭発表を通して、改めてリスニング能力不足やスピーキング能力不足を実感し、英語力向上のための努力が必要だと感じました。

三日目はポスター発表を行いました。研究で使用しているショウジョウバエの変異体につ

いて興味を持ってくださる方が多く、ゆっくり説明をする時間ができて良かったです。また、口頭発表では理解できなかった研究や、分野外の研究を聞くことができて良い経験になりました。しかし、英語でのディスカッションを目的としていたにも関わらず、日本語でのディスカッションになってしまったことや、自分が説明する際に分かりやすく研究内容を伝えることが出来ず、自分の研究内容への理解不足があった点については反省すべきだと思います。

韓国滞在中には本場の韓国料理を堪能し、明洞や景福宮を訪れるなど韓国の文化に触れることが出来ました。また、過去に韓国語の授業を受講した経験が、地下鉄を利用する際などに役立って嬉しかったです。

今回このシンポジウムに参加し、英語を使ったプレゼンテーションという貴重な経験をする事が出来て良かったです。一方で、英語力やプレゼンテーション能力不足を改めて感じ、今後の学習に対する意欲に繋がりました。これから先研究を続ける上でよい刺激を受けることができ、より一層熱心に研究に取り組みたいと思いました。

最後に、シンポジウムを企画・運営してくださった方々、シンポジウムに参加するにあたってご指導くださった教授や教員の方々、梨花女子大学の先生、学生の方々に心から感謝いたします。

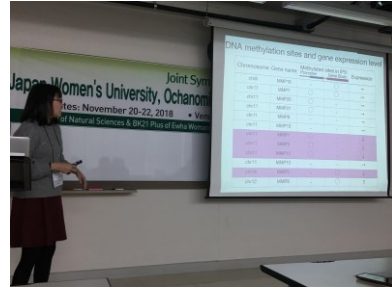
第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 片桐 沙紀

所 属(Affiliation): 理学部生物学科 (指導教員(supervisor): 由良 敬)

発 表(Presentation): Gene expression regulation of the MMP family revealed by cell reprogramming

今まで何度か学会の年会で研究発表を行う機会があったが、英語で発表を行う機会は今回が初めてであった。そのため、今回のシンポジウムの参加は私にとっては挑戦的な出来事であった。しかし、今回参加して思ったことは、基本的には日本語で行う研究発表と大きく変わらないということだった。どうやら私は英語が苦手であるという意識に囚われすぎていて、目の前の現実が見えていなかったようである。今回参加したことによって、今の自分の立ち位置が鮮明になったように感じる。



基本的に日本語でも英語でも同じだと思った理由は、研究発表においては英語が流暢であることよりも説明の仕方の方が重要であると思ったからだ。日本語でも英語でも、相手の質問が何を求めているか、その質問に見合う回答を自分が持っているか、そして、その説明を相手の知識量を推測しながら説明ができるか、ということが大切であるのだと感じた。無論、英語が流用に話せるようになるべきではあるが、そもそも相手に伝わるように説明するという行為は日本語でも難しい。私が先に取り組むべき課題は、どうすれば相手に伝わるように説明できるかである。

発表を通じて、「相手に伝わるように説明する」という行為は、「教える」ということと同義であると感じた。私は教職課程を履修しており、今年の10月に教育実習を行ったところである。教育実習中では私は中高生を相手に生物の授業を行っていた。生物の授業を行っている間は、私が教室で最も詳しい人となり、生徒たちの知識量のずれを考慮しながら教えていた。この時に、ある生徒がどこまで知っているのかを把握できないとどんなに言葉を重ねても生徒は理解できなかった。今回の口頭発表も授業を行うときと同じく、発表しているときは、私が一番詳しい人になり、聴衆の知識量は不明という状態であることに気がついた。発表を行う前は、自分自身はまだ学部生であり聴衆の方々の方が詳しいはずだと考えていた。しかし、同じ生物学においても、専門分野ではない分野の話となると知らないことが多いということを知った。そのため、まず話を始めるときには聴衆の知識量を考慮しておくことが大切であると痛感した。ただ、口頭発表は大変ではあったが、自分の研究について多くの人に聴いていただけること、意見を頂けることの楽しさを感じた。

今回は口頭発表だけではなく、ポスター発表も行った。ポスター発表では聴衆は口頭発表の時と比較して人数が少ないため、相手の理解度を確認しつつ話を進めることができるのが魅力だと感じた。今回のポスター発表では生物学以外を専攻している学生も私のポスターを見に来てくれたが、前提知識が普段話している生物学科の同期とは違うため、自分が伝えたいことがちゃんと伝わっているか不安であった。一方で、異分野の人に自分の発表を聞いてもらえることの楽しさを感じた。

今までは研究を行うということは、解析して結果を出すところまでであると考えていた。しかし、今回の発表を通じて、研究とは解析して結果を出した後、その知識を他の人々と共有するところまでを指すのだと思うようになった。自分がどのような発見をしたとしても、その発見を他の誰かに伝えなければその発見はなかったことになってしまうのだと思った。だからこそ、自分の発見を他の誰かに伝えることが大切であり、その際に英語が苦手であるということに怖気ついてしまっては勿体無いし、できないなりに伝える工夫をしてみる方が自分としては好ましいと思った。

それでは、どうすればより「相手に伝わるように説明する」になるのだろうか。私は教職課

程を履修しているため、履修していない学生と比べれば人に教える機会は多くあったと思う。また、研究室で後輩に助言する機会にも恵まれているが、私の説明する技術はなかなか上達しないように感じる。そこで、今回のシンポジウムで分かりやすい発表がどのように行われていたかを思い返すことにした。

理解しやすい発表の特徴として、1 つめに研究の背景の説明がしっかりしているということであった。生物学を専攻している人ならばおおよそ知っていると思われるところから話を始め、次にその分野を専門としている人なら知っていることを提示するという流れが理想的であると感じた。特に今回は同じ学問領域の人が集まっている訳ではなかったため、なおさら研究の背景の説明が重要であったと思う。

また、説明したいことの量の調節が大切であると思った。例えば、スライドの中に図が複数あると全ての図を理解するところで聴衆が戸惑ってしまい、話の流れを理解することが難しくなってしまう。また、そもそも異分野の人では図の見方が全然わからないこともあるため、図の説明をしっかり行っている発表は分かりやすいと思った。図の見方の説明をするとどうしても時間を消費してしまうため、基本的に使用する図はなるべく一目で理解できるものにすることが大切であると感じた。

そして、最も大切なことは、話の筋が通っているかである。そもそも話の筋が通っているかは研究を行っている段階で決定するはずである。しかし、いざ発表するためのスライドを作成し、他の人に聞いてもらおうと全然伝わらなかった。この経験から、独りよがりになりがちな部分がいかにか多いのかを実感した。話の筋が通っているかということは、恐らく自分ひとりでは見分けることが難しいことなのだと思う。だからこそ、多くの人に発表を聞いてもらうことが大切なのだと思う。

今回の発表を通して、自分のできていないことが明確になったと思う。それは辛いというよりも、自分の視界が開けたような清々しい気持ちである。そして、できないことがわかったことにより、これから自分が何をすればいいのかということが見えてきた。大変なこともたくさんあったが、このシンポジウムに参加できたことを非常に嬉しく思う。今回の経験を生かし、今後の研究発表では、相手に伝わるように説明できるように努力したい。

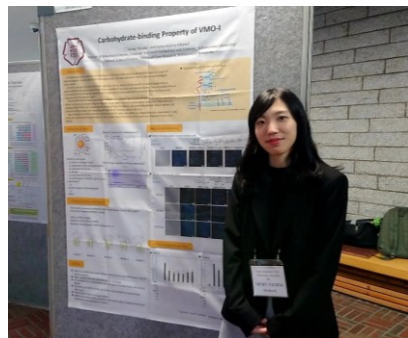
第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 安田紹子

所 属(Affiliation): 理学専攻化学・生物化学コース (指導教員(supervisor): 相川京子先生)

発 表(Presentation): Carbohydrate-binding property of VMO-I

今回のシンポジウムが、学外の方に自分の研究について口頭発表を行う初めての機会でした。口頭発表は、学部の卒研発表以外では行ったことがなく、英語での発表も初めてだったので、採択の連絡をいただいてからは楽しみであると同時に不安もありました。英会話は昔からやっていたので、英語を聞いて理解するということに対してはあまり心配もなかったのですが、研究の話をするとなると普段使っている単語とは少し方向が異なった語彙を求められると思ったので、どの程度の英語力が必要なのかはかりかねていました。しかし、英語アカデミックプレゼンテーションの講義が始まり、同じ目的を持った方々とクラス全体で準備を進めていく中で、だんだんやるべきことが明確になっていったように感じます。講義での発表練習を通して、自分のプレゼンテーションの仕方だったり、スライドの内容や情報量についてだったり、専門分野の違う方から多角的にアドバイスをいただけたことが、とても役に立ったなと感じました。また、研究室内で発表練習の機会を多く設けていただき、先生や研究室メンバーに多くのアドバイスをいただけたこともわかりやすい発表を行う上で、大きな助けとなりました。専門分野の違う方に自分の研究をできるだけ理解してもらう、というのを念頭において、スライド中の文字をなるべく少なくしたり、イントロや実験手法をイラストを交えたりしながら作れたのは、これから先、日本語で発表を行う際にも参考になるいい経験だったと感じています。



実際に韓国に行ってから3日間はあっという間でした。口頭発表は最後のセッションだったので、午前中は落ち着いた気持ちで他の方の発表を聞くことができ、自分の発表の際にも思ったほど緊張せず臨めました。その要因の一つには、座長がお茶大生だったというのがあるのかもしれません。前述の通り、発表練習の機会も多くとっていただけていましたし、想像していたより会場の教室が小さかったので、気負うことなく発表ができたのではないかと思います。質疑に関しては、伝えなかったことをうまく伝えきれなかったのが、今後同じような機会があった時にはちゃんと伝えられるような語彙力を身につけておきたいと思いました。ポスター発表では、様々な分野の方に聞きに来ていただきました。口頭発表の際にうまく質問にお答えできなかった先生にも来ていただいて、多くの時間を割いて説明できたので、フォローできてよかったです。専門分野が違うことで、質問の角度もかなり異なるということを2時間という短い時間ではありましたが実感することができました。来ていただいた方はほとんどが日本人だったので、説明も質問も日本語で受けていたのですが、英語で同じだけのことが話せたかという点かなり疑問が残るので、そのあたりは今後の大きな課題としたいと思います。ただ、ありがたいことに **Best presentation award** をいただきましたので、このことはとても自信になり、より良いプレゼンテーションを行いたいという意欲にもつながりました。

2日目の発表を通して感じたのは、日本の学生と韓国の学生のプレゼンの仕方がかなり違うという点です。自分を含め日本の学生は、多くの人が原稿を手元に用意して喋っているのに対して、韓国の学生はほとんど原稿を持たず、オーディエンスに伝える、ということを意識して喋っていたように思いました。渡航前に受講していた講義で、「プレゼンテーションは伝えるもので、原稿を読むだけでは伝わらない。原稿を読むだけでは、オーディエンスの反応に合わせて説明を加えることもできないし、相手に伝わっているかもわからず、自分が用

意したものを喋っただけで終わってしまう。」と言われたことを思い出しました。英語に自信がないというのがあるのだとは思いますが、教育の過程でプレゼンテーションを行うということがどういうことなのかを、もっと考える機会があればまた違うのかなと思いました。このことに関連して、韓国から帰ってきてからの講義で 1 人の方が「英語が苦手で発表が嫌だったけど、前に立ってみたらそれはどうでもよくて、自分の研究のことを伝えたいと思った。」と話していたことが印象的でした。

昨年シンポジウムに参加した先輩から話は聞いていたのですが、梨花女子大学が本当に綺麗なところでとても感動しました。お茶大とはそもそも規模も違うのですが、デザイン性の高い建物が多くて魅力的だなと感じました。また、廊下に座って休憩したり、勉強したりできるスペースが多くあるのも日本とは違うところだなと思いました。一方で、山を登るのは本当に大変で、毎日行き来するのは辛そうだなとも思いました。

また、今回は自由時間の間に梨花女子大に近いところを観光できたのもいい思い出になりました。ごはんを食べに行ったり、買い物をしたりする中で日本との違いも肌で感じる事ができました。一番印象的だったのは交通機関です。電車しか使っていませんが、韓国の人には駅で電車を待つ時に開くドアの目の前に立って待ったり、電車の中で普通に電話をかけていたり、日本ではあまり目にしないような光景にたくさん出会いました。妊婦さん専用の優先席があったのには驚きましたが、そうでなくても途中から乗ってきたお年寄りに声をかけて席を譲る人が多くて、年上の方を大切にする文化が根付いているんだなと感じました。

今回の研修を通して、梨花女子大学の方と交流を持てたのももちろんですが、お茶大生同士で横のつながりが持てたのも良かったなと感じています。普段、学科や専攻が異なる方々とは交流する機会がないので、研究分野の似た他専攻の方の発表を聞く機会はとても貴重でした。お互いにディスカッションすることで研究への理解が深まりましたし、新しい知見を得ることもできました。発表を行うにあたって、自分の研究を見つめ直すいい機会になりましたし、他の方の研究発表を聞いたことで刺激を受けたことも多くあり、得るものが多い合同シンポジウムになったと思います。

第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告

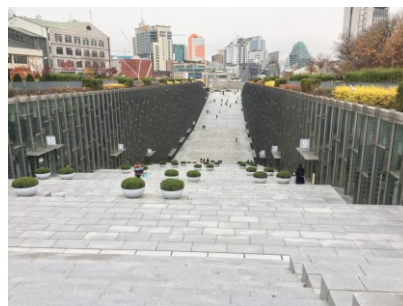
参加者名: 富澤 英香

所 属: 理学専攻 化学・生物化学コース (指導教員: 近藤敏啓)

発 表: 固体基板上における3次元ポルフィリン-金属有機構造体の作製および評価

今回、自分の研究内容を英語で口頭発表する機会を得ました。過去に行った英語でのポスター発表や日本語での口頭発表に比べてプレッシャーが大きく、自分自身への大きな挑戦となりました。

10月から授業を通してプレゼンテーションの準備を始めましたが、分野を跨いで発表することは存外難しく、しかし面白かったです。授業を通して、個人で発表資料を作成して発表し、理学専攻(または理学部)の他分野の方や先生からレビューをいただくという流れは、私の発表資料作りや人前で話すスキルを大きく向上させてくれたと感じます。優れたプレゼンテーションを見ることが、不十分な箇所を指摘されることは、より良いものを作ろうという向上心に対する良い刺激となりました。普段は、人前で発表する際は、覚えた原稿を丸読みしてしまうのですが、聴衆を意識して何度も練習することで、徐々に話し手と聴衆が参加できるプレゼンテーションに仕上がっていったと思います。私が専攻する化学は、マクロな視点で我々の生活に結び付いており、イメージしやすいですが、研究的なミクロな視点になるとイメージがしにくいいため、その差を埋めるようなプレゼンテーションを作るように心がけました。今回は、Au(110)固体基板上にポルフィリン分子を含む、金属有機構造体(MOF)を作製し、各段階で走査型トンネル顕微鏡(STM)を用いて評価した結果を発表しました。化石燃料の枯渇や環境汚染等のエネルギー問題の視点からクリーンエネルギーは近年注目を集めています。なかでも、太陽電池は広く普及しています。しかし、そのエネルギー効率は依然として低く、ポルフィリン MOF は、光増感剤として太陽電池の効率を大幅に上昇させる可能性から注目を集めています。太陽電池は、広く親しみをもてる単語ですが、光増感剤やポルフィリン MOF といった、専門外の方には聞き覚えのない言葉を理解しやすく表現するように努めました。



期間中は、シンポジウムを通して様々な分野の研究内容を聞くことができ、とても楽しかったです。修士課程に入ると自分と類似する分野の方の発表を聞く機会がありますが、違う分野に触れる機会は、ほとんどありません。生物や数学、建築や物理分野の研究内容を聞くのは、とても新鮮でした。口頭発表では、化学系の学生の発表を聞きましたが、ポスター発表では個性的なポスターも多く、とても充実しました。私も十分プレゼンテーションを準備したつもりでしたが、いざ本番となると緊張してしまい練習通りにはできませんでした。しかし、これは本番慣れをしていないのが原因だと考えています。英語で口頭発表をするという最初の一步目が今回のシンポジウムであったため、これから積極的に発表等の機械をつかんでいこうと思いました。他の生徒の口頭発表を聞いていると、発表慣れをしている生徒は素人目でも分かり、彼女たちのようなプレゼンスキルを身に付けたいという気持ちと、同年代でも、こんなに流暢なプレゼンテーションをできる学生もいるんだという焦りの両方を感じました。発表外では、梨花女子大学や日本女子大学の生徒と交流できたことも、嬉しく思います。拙い英語ではありましたが、コミュニケーションをとることができた体験は自分への自信となりました。梨花女子大学は、お茶の水女子大学と比べて非常に大きなキャンパスで構成されており、13個のカレッジが存在している規模に驚きました。右上の写真にあるような石造りのスロープおよび階段が、この大学の名所のひとつとなっているようです。この施設は地下1階から地下4階にわたって作られており、中にはカフェやレストラン及び映画館やジムが完備されていました。小さなショッピングモールのように世の中には様々な大学があるのだと感じました。大学キャンパスは山の上であり、駅から会場までの道のりは、ちょっとした登

山のようにした。キャンパス以外に、授業や教室についても違いがあったのが印象的です。1 日のスケジュールに昼休みの概念はなく、生徒は自分たちで授業スケジュールを組んで昼食等を済ますそうです。梨花女子の先生たちは、割り振られた授業が昼食時間にある方もいらっしやったので、忙しそうな印象を受けました。授業教室は席割が決まっているほか、出席は教室の入り口にあるカードリーダーで行っているなど、とてもまじめな生徒が多いのだろうと感じました。最寄り駅からキャンパスにかけては、女子が好きそうなカフェや食堂、化粧品店などが立ち並んでおり、非常に栄えており目に楽しいものでした。地下鉄は、東京の地下鉄と構造が似ており、戸惑うことはありませんでした。ラッシュ時の乗車率も似ており、通勤ラッシュと帰宅ラッシュは満員電車でした。

一日目の夜には、大学近くのレストランで韓国名物のひとつである、サムギョプサルを食べながら交流をしました。同じテーブルになった梨花女子の生徒や日本女子の生徒と研究室や就職についての話が弾み、とても有意義なものとなりました。梨花女子大では学部を卒業した後、修士課程に進までに大学院入試とは別に勉強期間が存在するらしく、院試に合格したあとも研究室には所属しているが大学には所属していないという特殊な期間が存在するらしく、驚きました。しかし、その分勉強に熱心な生徒が修士課程には多いのだらうと思います。シンポジウム中のコーヒープレイクには韓国のお菓子を食べることができたのですが、日本のお菓子と似ているものや全く違うものが入り混じっていたことも面白かったです。「これは何？」から会話を始めることができ、他大学の生徒との談笑につなげることができました。このような小さいことから街の雰囲気や文化など大きなものを含めて、他のコミュニティに属する人やモノに触れることは自分のアイデンティティを確認すると共に他を認めることにも繋がるのだらうと、シンポジウムを通して感じました。そういった意味で、この3 女子大学交流シンポジウムは学業面でも精神面でも、とても良い機会になりました。今回のシンポジウムでは、幸運にもプレゼンテーションで賞をいただくことができました。これは、授業を通して指導してくださった Sabine 先生や私のプレゼンテーションに意見をくださった受講生、そして指導教員の近藤先生のおかげだと感じています。次に人前で発表するような機会があれば、さらに聴衆の印象に残るようなものに仕上げたいと感じています。

今回の合同シンポジウムに参加し、口頭発表とポスター発表を成し遂げたことは、私の自信につながる経験となりました。このような素晴らしい機会を与えてくださったことに感謝します。

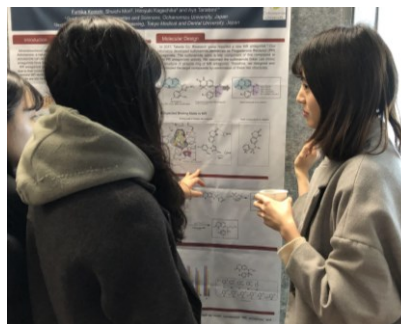
第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 小西 史香

所属(Affiliation): 理学専攻 化学・生物化学コース (指導教員(supervisor): 棚谷 綾)

発表(Presentation): Development of Nonsteroidal Mineralocorticoid Receptor Antagonists

今回本シンポジウムに参加しようと思ったのは、自分の研究内容を英語で発表できるということに惹かれたからだった。英語を使ってディスカッションをしてみたいという思いはあったもののそのような機会がなく、自分1人ではどのように練習すればよいのかわからなかった。しかし今回授業でプレゼンテーションの構成や発表の仕方を教えていただける機会があったため、挑戦することにした。また、大学院に進学してから日本国内の学会で発表した際に第三者からの助言や疑問によって気付かされることがあったので、海外で発表することでさらに良い刺激を受けられるのではないかと考えた。



10月に8回に渡って受講したプレゼンテーション法研究の授業では、徐々に発表時間を長くしながら発表練習を行った。専門用語の英語の発音やイントネーションが日本語と大きく異なることにも苦労したが、最も苦戦したのはどうしたら専門外の人に自分の研究分野を理解してもらえるかという問題だった。普段研究室での実験報告や学会での発表など、同じ分野を専門とする人たちの前で話すことが多いため、専門外の人にとってわかりにくい箇所を指摘して頂いたことがとても参考になった。なるべく専門用語を減らし、イメージしやすいよう図やグラフを簡略化するなどの工夫をして内容を推敲した。それに加えて、声の大きさ、話すスピード、抑揚の付け方、視線のやり方等、発表時に気を付けるべきことを先生にアドバイスしていただいて、聞いてくれる人に伝わりやすい発表を意識するようになった。毎週新たなプレゼンをつくっていくのは非常に労力がいるもので大変だったが、毎回先生に的確なアドバイスをいただきそれを修正していくことで最終的に納得のいくものに仕上げることができた。

シンポジウム1日目は、先生方の講演と梨花女子大、日本女子大の学生との交流会があった。交流会では英語で初対面の人と会話することにとっても緊張したが、徐々に打ち解けて梨花女子大やお茶大の他の学生と韓国の学生生活や食文化、趣味の話をして楽しく有意義な時間を過ごせた。

2日目は口頭発表が行われた。私は化学部門で自分の研究を発表した。授業でよく先生に指摘されていた原稿を見て話してしまう癖を直そうと何度も練習して本番に臨んだが、本番は緊張してしまい台詞の間違いを恐れるあまり原稿を見てしまったため、前を向いて話すことができなかった。一方で韓国の学生たちが原稿を見ずにスムーズに発表をしていたのに驚いた。英語の発音もナチュラルでスピードもちょうど良かったため聞き取りやすく、プレゼンテーションのレベルの高さを感じた。その姿を目指して私も今後は人前で堂々とした発表をできるよう、他の人がいる場で発表をする練習を重ねたい。他大学の学生の発表は化学合成の条件検討から化合物の生体利用のための研究まで、内容が多岐に渡っており興味深かったが、初見の発表を完全に理解するための英語力と化学知識が備わっていないことを痛感し、自分の研究テーマだけでなく広い範囲で見識を深めたいと感じた。

3日目はポスター発表が行われた。自分のテーマ(医薬品化学)に関連する化学・生物のポスター発表を中心に回った。気になった点は質問をしたり、逆に自分のテーマの質問に答えたりして非常に勉強になった。特に自分の研究について、梨花女子大の先生や学生と英語でディスカッションをしたのが印象に残っている。研究目的や成果について質問され、英単語が出てこず言葉に詰まることもあったが結果的に言いたかったことを理解してもらえたと思う。プレゼンテーション法研究の授業やお茶大での最終リハーサルで、先生や

他の学生に質問していただき英語で答える練習をしたおかげで瞬時に英語で対応できる力がついたのだと思う。拙い英語でも相手に伝えたいという気持ちさえあればコミュニケーションはとれるということを感じた。シンポジウムに参加する前は英語で説明することに不安があったが今回のプログラムで研究内容を話して理解してもらえたことで少し自信をつけることができた。その後梨花女子大の学生と学生生活や将来の進路のことを話したのも貴重な経験になった。韓国の学生は就職が厳しいため博士後期課程まで進む人が多いと聞いて驚いた。

3日間の韓国滞在で、韓国の文化に触れることもできた。2日目には弘大、3日目には梨大を訪れ、おいしい韓国料理をいただいた。韓国の人たち(主に梨花女子大の学生たち)と交流して、日本では出会えない考えや価値観に触れられたのも私にとって貴重な経験になった。

本シンポジウムに参加したことで、英語力、プレゼンテーション力、説明力を磨けたと感じている。自分が研究内容を理解しているかではなく、いかに相手に伝えるかが大事だということに改めて気付かされた。また、自分の研究テーマを一から見つめ直したことで、これから研究を進めていくためにクリアすべき課題を改めて考えさせられた。今回の体験は今後の学生生活や就職活動、社会人生活でもきっと役に立つと期待している。このような機会をいただけたことに感謝し、日々研究に励んでいきたい。

来年はこのシンポジウムがお茶大で開催されるということで、ぜひ来年も参加したい。

第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 朴 昭泳

所 属(Affiliation): 理学専攻 化学・生物化学コース

(指導教員(supervisor)): 棚谷 綾

発 表(Presentation): Development of Aromatic Squaramide Liquid Crystals

わたしは現在、東京大学大学院工学系研究科化学生命工学専攻の加藤隆史教授のご指導を受けながら共同研究を進めている。所属研究室の棚谷研究室の先輩や後輩たちをみると、実験をはじめてから結果が出るまでが長い。わたしは共同研究のおかげさまで、研究室の中でも実験の結果が早く出たほうだ。卒業論文の提出日の一週間前にデータをそろえることができ、無事卒業論文をまとめることができた。博士前期課程のそのデータで第9年目は、その続きの実験を進めるとともに、原著論文に挑戦してみた。今年の春、Chemistry Letters に投稿することができたが、それまでがかなり大変だった。30回以上の修正をかさねて、再現性を確認するために、卒業論文のために行った実験を最初からもう一度行った。かなり大変だったけれど、わたしの論文がエディターチョイスされたり、表紙を飾ったりしたときは、大変だった分とても嬉しかった。

そのおかげさまで研究発表する機会も多く、大学4年生の時から現在まで、ちょうど10回の発表を行った。その10回目の発表が、今回参加した第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウムでの発表である。それまでの9回の発表はすべてポスター発表で、そのうち英語での発表は一回のみだったため、学生としての最後の発表は英語で口頭発表してみたいと思い、参加することにした。

プレゼンテーション法研究を履修し、Sabine Gouraud 先生と他学科の学生からのアドバイスを参考に、修正に修正をかさねて、約1ヶ月かけてプレゼンテーション資料を完成することができた。今までの学会の準備は、前の発表資料に少し修正を加えただけでも完成することができたけれど、今回に関してはそうすることにはいかなかったのが、大変だった。専門外の人にもわかりやすく、例を挙げながら、専門分野用語はなるべく避けて、英語で発表することは、思ったより大変だった。

正直なところ、「梨花女子大学校」の学生の前で発表しなければいけない、ということにもとてもプレッシャーを感じた。日本にいとつい忘れがちだけど、韓国の学生は「必死に」勉強し、「必死に」自分を磨き、「必死に」生きている。わたしの友達もみんな、一日の24時間をフルで活用して、自分の能力を高めるために努力を続けている。その中でも「梨花女子大学校」の学生は優秀で、一緒に話していると、ゆとりをもってしまっている自分が嫌になってくるほどだ。そんな優秀な人たちの前で発表するのは怖かったけれど、発表だけではなく座長になる機会を与えてもらったおかげさまで、優秀な人たちの前で自信を持って発言できる力をつけることができたと思う。

梨花女子大学校の学生の方がお茶の水女子大学の学生より参加人数が多いと思っていたが、会場が近いにもかかわらず、参加人数がとても少なかったのがっかりした。韓国は12月上旬が期末テストなので、その勉強時間を確保したくて参加をあきらめた人も多いと思う。日本から参加する分には、まだ寒くない時期に行くことができうれしかったが、来年度からは少しでも多くの学生が参加できるように、時期も考慮したほうがいいと思った。来年度からは日本で開催することになると聞いているので、日本に来るチャンスだと思って参加してくれる梨花女子大学校の学生が増えることに期待している。

千田萌生さんと一緒に懇親会の代表として参加したが、梨花女子大学校の代表のキム・セヨンさんと担当者の方々がほとんど準備してくださったので、ほぼ何も準備することがなかった。初日に食べたサムギョプサルはとてもおいしく、キム・セヨンさんと深くお話することが



できてうれしかった。梨花女子大学校にもお茶大と同じく何人か代表がいたはずなのに、なんでずっと一人で仕事しているのですか？ときいたら、他の代表者はドクターの先輩たちで、忙しくて仕事を手伝ってもらえない、という答えが返ってきた。もう少し忙しくない人に代表を任せることはできなかったのかな、と疑問だった。しかも、キム・セヨンさんは今学生ではなく、「研修生」みたいな身分らしい。その理由を聞いて驚いた。研究室の先生に、「あなたは研究を進めるにあたって必要な知識がまだ十分ではないから、十分勉強してから大学院に入学しなさい。」と言われ、先生が納得するまで勉強を続けなければいけないらしい。院試さえ受ければ大学院生になれるお茶大とは大違いだった。確かに、研究を進めていると自分の勉強不足を思い知らされることが多い。勉強しながら研究を進めることもできるけれど、確かに大学院に入る前に身につけておくことができれば、効率的に研究を進められるかもしれない。

驚いたのは彼女の話聞いた時だけではなかった。梨花女子大学校に高校の友達がいたので、連絡したら学校内のカフェで、7年ぶりに会って近況を聞くことができた。彼女は2012年に梨花女子大学校に入学したので、もう学校にいないと思っていたが、大学院に進学し、わたしと同じく修士課程2年生だった。修了したら就職するかどうかを聞いたら、その返事にまた驚かされた。彼女が所属している研究室は、論文をまとめるのに最低3年の研究時間が必要で、長ければ5年もかかるため、今年度には修士課程を修了することができたということだった。博士課程じゃないと日本ではあまりみたことないようなことが、韓国では修士課程で普通にあるようだ。

4年間の大学生活を終え、そのまま大学院に進学し、短いけれど2年以内で成果をまとめ、早めに社会に出た方がいいのか、それとも、大学院に進学する前に満足いくまで勉強し、入学した後も時間に拘束されず、満足いくまで研究をしてから社会に出た方がいいのか。今回のシンポジウムに参加し、梨花女子大学校の学生からたくさん話を聞いて、たくさん考えさせられた。今後を考えると絶対韓国の進め方のほうがいいような気がしたけれど、日本で韓国の学生と同等に努力することができれば、活躍する場所として最適な、恵まれた環境であることに気づいた。

今回のシンポジウムに参加し、英語で研究発表する力がついたのはもちろん、梨花女子大学校の学生たちに刺激を受けることができて良かったと思う。この3日間で感じたことを今後の研究生活に活かし、もう少しだけ頑張ろうと思った。

第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 千田 萌生

所属(Affiliation): 理学専攻 化学・生物化学コース (指導教員(supervisor): 山田 眞二)

発表(Presentation): Catalytic solid-state photoreaction

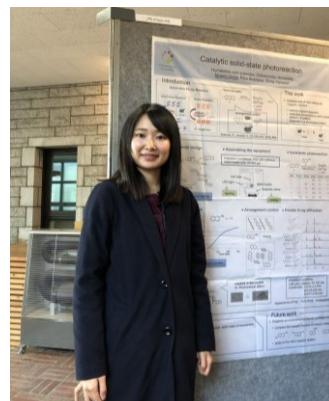
私にとって、自分の研究を英語で説明したり、大勢の人の前で英語を使って話すような経験はこれまでになく、昨年は興味をもちながらも参加するには至らなかった。しかし来年からは、英語で行われる会議などに参加する可能性があり、将来的にもグローバルに活躍したいという思いがあるため、英語での発表に少しでも慣れておきたいと考え、第9回を迎える本シンポジウムへの参加を決意した。シンポジウムに向けて毎週受講した Sabine Gouraud 先生の授業では、発表練習はもちろん、人前で発表する際の心得や発表で多く使われる英語のフレーズなどを教えて頂けた。また、発表練習では、化学の枠を超えて自分の研究を発表することが初めてであったため、専門が生物や数学の方達が理解できないポイントを押さえることが特に難しかった。しかし、先生や生徒からの丁寧なフィードバックを毎回して頂けたため、どこが良かったか、悪かったか、分かりにくかったかなどを自分で把握して次に繋げることができ、自信を持って当日まで準備することができた。また、私は本学の学生代表として梨花女子大学、および日本女子大学の生徒とメールでやりとりをする機会があった。韓国出身のもう1人の代表である、朴さんと協力しながら、シンポジウムに向けて各大学の情報を得るためにやりとりを重ねた。この経験を通して、互いの情報を事前に共有しただけではなく、発表だけでは得られないリアルな英語での書き言葉やメールの書き方なども培うことができたと思う。

こうして1日目に初めて梨花女子大学を訪れた。会場である理学の建物に向けて歩くと、まずその立派なたたずまいに圧倒された。また会場内に入ると、生徒達の丁寧で温かいおもてなしに感動し、自分の中でシンポジウムへの参加を実感することができた。夜に行われた懇親会では、これまで学生代表としてメールのやりとりをしてきた梨花女子大学、日本女子大学の学生と初めて対面し、直接話す機会を得た。梨花女子大学の学生代表の生徒には、大学の近くにあるおすすめのお店や特別な近道を教えてもらい、日本女子大学の生徒とは、分野を超えて研究について語るなど、初日から有意義な時間を過ごすことができた。

2日目には、これまで練習して来た口頭発表を迎えた。発表では、梨花女子大学、およびお茶の水女子大学の化学の先生が3人おり、その中の2人は私と同じく有機化学の専門の方だった。梨花女子大学の生徒の発表を聞いた際には、その英語力に圧倒されたことはもちろん、高度な研究内容や堂々とした立ち振る舞いがとても印象的で、刺激を受けた。また日本女子大学の生徒も臆せず堂々とした研究発表であり、その姿勢は見習うべきものだった。1人は実際にキットを回すことで、実験をイメージしやすくする工夫をしていたことが印象的だった。自身の発表では、他の人の発表に動揺せず、落ち着いてこれまで練習して来た通りに発表することを意識して行った。特に有機化学は化学の中でも複雑な分野なので、全員に分かりやすく丁寧に説明することを心がけた。その結果、3人全ての先生に質問していただき、他の分野の方からも興味をもってもらえたことが嬉しかった。しかし、英語での質疑応答は発表のように練習通りとはいかず、正確に先生の意図を汲み取ってその場で的確に答えることが難しかった。そのため、日本語での質疑応答のように、正確に簡潔に答えることができず、悔しい気持ちが残る結果となってしまった。特に、実験条件を変更しないのかといった質問では、きちんと自身の考えまで伝えることができず、現状を述べるのみになってしまった。英語で的確に簡潔に述べられるように、自信の英語力をこれからも磨き、将来仕事を通して多くの国の方とディスカッションを深められるようにしたい。口頭発表終了後は、梨花女子大の方に教えてもらったお店で昼食をとり、大学構内を見学して回った。大学のグッズを売るお店では、梨花女子大学の歴史が動画つきで放送されていて、大学の歴史を感じることができた。また、この日はお茶の水女子大学からのお土産を配布したが、梨花女子大学の生徒は常に全員参加している訳ではないため、私だけでは本シンポジウムに関

わる全ての方に配布することは困難だった。しかし、梨花女子大学の学生による協力のもと、教室をくまなく回ることでおおよそ全ての生徒に配布することができた。初めは不安を感じていたが、国籍を超えて協力したことにより、感慨深い貴重な経験となった。夜は化学科の同期の他に、これまであまり関わることのなかった他の研究室の後輩と行動をともにした。3 女子大学での交流はもちろんだが、こういった機会だからこそ、同じ所属間の仲もより深めることができたように思う。

3 日目のポスターセッションでは、全分野に渡って廊下に貼り出され、口頭発表のときよりも広く交流がなされていたように感じた。同じ大学でありながら、あまり交流のない建築の先生などと話すきっかけにもなり、大学に関するわたしの知り得ない知識など、とても興味深い話を聞くことができた。自身に関しては、口頭発表のときよりも更に具体的な質問を有機の先生から受けたことで、今後修士論文をまとめるにあたり、研究を進めていく方針を考える良いきっかけとなった。また最後に、これまでお世話になった梨花女子大学の学生代表と別れの挨拶をしたときは、3 日間という短い時間だったにもかかわらず色々なことが思い出されて感慨深い気持ちになった。賞こそもらえなかったものの、様々なことをこのシンポジウムで得ることができたので、参加してよかったと思う。



これらの経験を通して、英語に対するモチベーションが自分の中で高まる結果となった。本シンポジウムに参加する前は、このプログラムをこなすことで満足するだろうといった気持ちでいたが、実際に参加したことによって自分の未熟さや発表の難しさなどを痛感したためである。また、フランス人である Sabine 先生を初め、梨花女子大学の先生や生徒とコミュニケーションをとったことにより、様々な英語の話し方や国による特徴が存在することを実感した。机の上での勉強や CD ではこのような学びは得られなかったと思う。更に、今までは、今いる場所での日本語を使ったコミュニケーションで不自由なく過ごせていたが、将来は日本だけでなく、世界に目を向けることが研究者としてもますます必要になると実感した。今後、海外の学会などで研究者と情報共有を行い、グローバルに活躍していくために、今回のシンポジウムで培ったこと、反省すべきことを忘れずに、しっかり活かしていきたい。

第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 山本 百合

所 属(Affiliation): 理学専攻情報科学コース (指導教員(supervisor): 小口 正人)

発 表(Presentation): Distributed Secure Data Mining with Updating Database using Fully Homomorphic Encryption

今回の日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加するにあたって、私は目標を3つ立てた。1つは英語でのプレゼンテーション能力を向上させること、2つ目は他学科の研究発表を聞き、自分の中に眠る理学全体への興味を活性化させること、そして3つ目は韓国という初めて出会う土地・人・文化を直に受け取ること。日本に戻ってから3日間を振り返ると、これらの目標は多少まだ悔しい部分もあるが、大体達成できたのではないかと感じる。



まず英語でのプレゼンテーションに関して、私は既に海外での学会発表を2回ほど経験しているため、参加決定の時点で英語の学会発表における自分の欠点を自覚している状態だった。数分程度の日常会話であれば、英語でも自分が考えて居ることを表現し、不完全ながらもコミュニケーションを取ることができるのだが、数十分間自分の英語トークが続くとなると、心理的に怖くなり、原稿に頼ってしまう部分があった。この状態を直すためには当然練習の積み重ねが必要だが、普段の研究生生活では研究自体の進捗を進めていく作業で忙しく、なかなか発表練習のためだけに時間を割くことが難しい。場合によってはプレゼンテーションを渡航直前に慌てて仕上げに入らなければならないこともあった。今回のシンポジウムでは、参加の条件として、英語プレゼンテーションの授業に出席することやリハーサルに参加することが求められた。本来であれば、研究の進捗のために、授業に出席する暇は無いはずだったが、どうしても自分のプレゼンテーションに対する苦手意識を克服したかったため、覚悟を持ってシンポジウム参加を決めた。このおかげで発表練習の時間を強制的に確保し、準備をきちんと行なった上で発表に望むことができたように思う。特に英語プレゼンテーションの授業に参加したことは、自分にとって院生生活を終える前にやるべき必要な経験だったと思う。講師の宮本先生は、科学英語に堪能な方で、お茶の水女子大学の卒業生でもあり、様々なキャリアを経た後に、講師となった今でも積極的に英語に触れようとする姿勢をお持ちの方である。「すごいな」と思わず尊敬の念を抱いた。授業は講師と学生でインタラクティブに進めるスタイルで、私が緊張して上手くいかないことがあったときも、「そういうことは私にもあります」など優しく肯定的なサポートをしてくださったのが安心感に繋がった。また原稿が棒読みにならないようにするためのコツも教えてくださったので、自分のプレゼンテーションに柔軟性を持たせることができたように思う。学生の側も優秀でプレゼンテーション能力が高く、意見をはっきり言える人が集まっていたため、すごく刺激的で気の抜けない空間で刺激的であった。

発表当日は、本番会場が自分の想定していた環境と異なったために、少し手間取ってしまった部分が生じてしまったことは反省しているが、原稿に書かなかったこともアドリブで補足するなど、自分のプレゼンテーションに自由な部分が生まれたことが嬉しかった。また片言ながらも、座長として日本女子大学の学生さん1人に質問もできたので、少し成長できたのかなと感じている。大変光栄なことに、今回のシンポジウムでベストプレゼンテーション賞をいただいた。私としては、授業やリハーサルで大学からの参加者の中に英語発表が自分よりも上手な人が何人かいることを把握しているため、もっと多くの人が受賞して良かったのではないかとと思うが、今回このような高評価を頂けて大変嬉しく思う。

また理学全体への興味についても、今回様々な分野の研究に触れられることができ、非常にワクワクさせてもらった。リハーサルや授業、シンポジウム当日において、植物や宇宙、人体や建築など情報科学以外の分野の研究の話を聞いて、お茶の水女子大学は規模が小さめ

の大学ではあるものの、研究対象は非常広大かもしれないということに気づかされた。どの人も研究に対してそれなりの意欲を持って取り組んでいることが伝わるプレゼンテーションだったと思う。また発表内容だけでなく、学生自身も非常に個性的で、人によっては研究室から伝承される物の見方が非常に訓練されていた。愉快的仲間たちと言って差し支えないほど、ソフトの面が良くできていることに感心した。プレゼンテーション終了後の夕方、その愉快的仲間たちと東大門デザインプラザ周辺を観光することになり、建築家ザハ・ハデイドの建造物を訪ねることになった。私は建築・建築家についての知識は全く無く、国立競技場のデザインが白紙撤回されたニュースがそれなりに盛り上がっていたことは記憶にあるが、そのデザインがザハ・ハデイドという建築家によるものだということはあまり認識していなかった。彼女らの誘いがなければ行かなかった場所だったと思う。正直あまり期待せずに見に行ったが、実際に見てみるとそのモノの魅力、面白さを結構感じた。渡航後も、そこから少しずつ彼女の他の作品について調べてみたり、自分が好きだと思える建物について軽く調べたりするようになった。研究は論文を作成することだけではなくて、人やコミュニティを生育することの中にもあるのかもしれない。学問に対する視野の広がりがあることにあった。

最後に韓国という土地について、私は初めて訪れる韓国がどのような場所なのか、あまり想像ができていなかったが、最終的にはとてもお気に入りの場所になった。お洒落で可愛い服やグッズがお店に沢山並べられて賑やかで、食べ物の味もかなり好みだった。初日のサムギョプサルから始まり、アワビ粥、トポギ鍋、チーズダッカルビ、キムパ、参鶏湯を3日間で頂いた。渡航前はよく知らない食べ物だったが、どれもとても美味しかった。韓国の初冬はやはり東京に比べて寒さを感じたが、韓国料理のホットな辛さのおかげで乗り切れたように感じる。明洞の屋外で買い物し、寒くなったら、参鶏湯とキムチを頂いて体を暖める。そうすると再び外に出る元気が湧いて、また目一杯買い物をする。ハングル文字も読めなかったが、とても面白そうなので、次に渡航する際にはある程度ハングル文字を学習したいと思った。隣の国なのだから、もっともっと色んなことを知りたいという気持ちが湧いた。

そして梨花女子大学の敷地の広さにも驚いた。今回のシンポジウムに関わるまでは知らなかったが、世界的に見ても最大規模の女子大学だそうだ。また全体的にお洒落で活気があり、大学グッズも魅力的なものが置いてあった。梨花女子大学の敷地内に”I'M NOT FUTURE WIFE, I'M FUTURE BOSS”というビビットな標語が書かれた垂れ幕があり、女性が強気で居られる良さがこの大学にあるのを感じた。お茶大は規模も小さいし、まだ若干大人しいのかななどと比較しているいろいろ考えるきっかけになった。勿論どちらにも良い点そうでない点はあると思うが、好戦的な女子大という姿に私は好感を覚えた。また、梨花女子大学の学生さんとは、ポスターセッションでお話することができた。自分の研究分野に非常に近い分野だったが、よく知らない部分でできちんと理解するのが難しかった。お互い頑張って理解を深めようとコミュニケーションを取りあったが、私の数学のその分野に関する前提知識の乏しさを少々痛感していた。申し訳なさを感じて居た話の終わりに、彼女から「あなたの公演を聞きました。暗号の内容でしたね」と英語で感想を言ってもらえたので、私の英語のプレゼンテーションをしっかりと聞いて覚えてくれていたことに感動した。知らなかったことは仕方がないが、これから彼女のポスターの内容を理解できるように数学も勉強したいと思うきっかけになった。また他の場面で、待ち合わせのために廊下を手持ち無沙汰で立って居たところ、梨花女子大学の学生さんにコーヒーを勧められ、控え室を作っていただいたこともあった。全体的に梨花女子大学の学生さんのレベルが高いなあと感心した。私も海外からのお客様をホストするときには様々な気遣いをし、諦めずにコミュニケーションを取っていききたいと思う。

これから私は年内の12月にはSIGGRAPH Asiaという大きな国際会議に学生ボランティアとして参加をし、来年1月には自身の国際会議参加としてタイで英語のプレゼンテーションの発表をする。今回の日韓3女子大学シンポジウムの経験を活かしていきたい。

第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 新倉梨加 (Rika NIIKURA)

所 属(Affiliation): 生活科学部 人間・環境科学科 (指導教員(supervisor): 元岡展久)

発 表(Presentation): Kenji Hirose's SH series in the 1950s

今回の合同シンポジウムは、私にとって初めて英語による研究発表の機会となった。加えて、初めて卒業研究の内容について学外で発表する経験ともなった。大学院生や、学部生でも研究を着実に進めている優秀な方々が多く参加する中、自分もこの機会に参加させて頂けたのは非常に光栄なことだった。初日、ソウル・金浦空港に到着後、移動が電車であったため、韓国の日常的な風景をすぐに目にし体験できたという点でとても興味深かった。その一つに、車内の優先席に赤ちゃんをあやすための小さなぬいぐるみが用意されていたことがあり、社会の中子供を育む気運を感じた。開会式と教授陣による研究発表の後、夕食会を兼ねたレセプションが行われた。日本女子大および梨花女子大の学生と韓国の定番料理であるサムギョプサルを囲み、梨花女子大の学生からお肉の焼き方や食べ方をレクチャーしてもらうという面白い形の文化交流をしつつ、交友を深めることが出来た。



シンポジウム 2 日目はセッションに分かれて口頭発表が行われた。口頭発表は今回のシンポジウムの中心と位置付けることができると思われる。今回の英語でのプレゼンテーションの準備に1か月半以上かけてきたことからその重要性は大きいといえる。口頭発表で話す英語は、日常会話の英語でも書き言葉の英語でもない、今までにあまり触れたことのない形態の英語だった。研究発表ということで、アカデミックであることが必要な一方、聴衆を引き込み聞きやすく理解しやすいことも求められる。加えて、自分の専門は建築であり、他の参加者などだいぶ異なっていたため、学域別セッションにおいても、基礎的な情報を伝え理解してもらうことも大事な事であった。この点については、英語プレゼンテーションの授業での宮本先生からご指導が大いに役立った。また、指導教員である元岡展久准教授の助言と指導なしには、まだ中途である卒業研究を口頭発表として中間的な成果を発表することに到達できなかったであろう。多くの方々からの支援・アドバイスがあったことで、それを受けた反省・修正・練習を重ねることができ、私は無事に今回のシンポジウムに臨むことができた。

本番の口頭発表では、聴衆者のほぼ全員が私とは異なる研究分野を持つ人々だったので、自分の発表が伝わるかどうかとても心配であった。グループの最終プレゼンターだったこともあり、待っている間は終始緊張していたが、いざ聴衆の前に立つと緊張がずっと消え一人一人の表情がとてもよく見えた。その表情の変化を見ながら話し、反応に対して応答するような余裕も少しできた。これはひとえに練習と指導の機会を与えて頂いたお陰であり、途中つかえる箇所があっても乗り切ることができたのは、今後の自信になった。また質疑では梨花女子大の教授から韓国と比較して感じたことをコメントしていただき、国境・文化の枠を超えて研究内容を共有することの意義を感じた一方、根本的な研究目的に関する質問で十分な回答をできなかった自分の至らなさを非常に反省している。また、私が発表したセッションには、天文学や物理学など普段は接点のない分野の発表が多く、そのいずれもが新鮮に目に映ったと同時に、彼女らの研究に対する熱意と作業量に圧倒された。

シンポジウム 3 日目はポスターセッションがあった。こちらも初めての機会であり、ポスターの作製から苦労した。また、ポスター発表は口頭発表と違って時間が区切られていない代わりに紙面に限りがあるため、伝えるべきことを誤解の無いよう端的に伝えきることができるかに関しても不安が残った。しかし当日、いざ始まってみると肩の力が降りて、普段から自分の研究テーマについて考えていることや研究で分かったことを素直に聞き手に伝えることだけだと気づ

いた。また他の人の発表を聞きに行くことも、知見を広めると同時に、研究への熱意から刺激を受けるといっても非常によかった。自分の専門分野の殻から出ることで、一見全く関係のないような生物や代数の研究トピックが建築に活かせるのではと感じた瞬間も多々あり、短い時間ではあったがとても充実したものであった。

ポスターセッションの後はクロージング・セレモニーがあり、今回のシンポジウムが終わってしまうことが名残惜しく思われた。3日間という時間はとても短く、移動時間も加味するとさらに短い間ではあったが、国境・大学を超えたとても濃密な時間を過ごすことができた。同じ研究室の学生との少し馴れ合った日常の関係から離れたコミュニティに飛び込んだ今回の機会は刺激的で、もっと研究に励もうと自分を奮い立たせるきっかけともなった。

シンポジウムそのものに直接関連することではないが、梨加女子大学のキャンパスは非常に魅力的で、普段建築設計を学んでいる身として学ぶところが多くあった。その一つに正門近くにあるドミニク・ペロー作の複合施設があった。(冒頭写真掲載) 足を踏み入れると、学生が各々好きな場所で作業したり友達と語らっており、まさに学生のための建築だと実感した。大学の玄関として・アイコンとしての特徴的で洗練されたデザインの中に機能的で心地よい空間をしっかりと備えている建築を身をもって体験できたことはとても貴重で、今後の自分の設計姿勢に多大な影響を与えてもらった。

今回のシンポジウム参加の経験は、今後の大学院進学及び将来のキャリアの中で非常に大きな意味を持つだろう。次に学会等で発表する際は、この経験を思い出して、適切な準備を整え、もう少し自信をもって挑むことができるだろう。学部生の間にこのような機会を得られたことはとても有意義であり、未来への礎となる機会を頂けたことに深く感謝したい。

第9回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 木村 文 (Aya Kimura)

所 属(Affiliation): 生活工学共同専攻(Cooperative Major in Human Centered Engineering, Architecture) 指導教員(supervisor): 元岡 展久(Nobuhisa Motooka)

発 表(Presentation): Practices under National Strategies of Digitization in Lithuanian Museums (2008-2017)

In the ninth Ewha-JWU-Ochanomizu Joint Symposium, I've got my second time to give my presentation in English. This symposium is the second time for me as well. Although, it was my first time to attend an international academic gathering. I study and research more seriously than the last time, but I was not confident of me. I can hardly say that everything went smoothly, but I learned that after every occasion, experience tells me how to convey the better.

My preparation started one and half month before the visit to Seoul. At the point of an application to the symposium, I had already finished the central part of my study including analysis and discussions. However, as it always happens, how to present to others is the question. Myself, I fully understand my research: what is the implication, what is the originality or what is the most critical point. On the other hand, people who listen to my presentation for the first time, they only know the title of my study, but nothing additional. Therefore, it is crucial to neatly prepare in advance for the occasion of showing my research.

Lithuania is the field of my research. Sadly, this small Baltic country recently independent from the Soviet Union is not famous yet in Eastern Asia. Primarily I focus on LIMIS (Lithuanian Integrated Museum Information System), which is introduced in Lithuania. This system is still only popular for museum lovers in Lithuania, although I think it is a representing case for digitization in museums. Thus I need to explain about Lithuania and LIMIS before I get into the main topic. Because I wanted to clarify my research in detail, I had to summarize the necessary information. I attempted to use visual aids, but I had to improve them several times before I could get the right image.

The preparation wasn't a lonely process. Especially for the oral presentation, in the autumn semester, I attend English academic presentation sessions every Wednesday. In the class, I could receive feedback from my fellow students including my physical gestures. I haven't noticed before, but a student once told me that the movement of my hand is somehow annoying. Even the filming in the class let me know a lot about myself. In one lesson, the teacher filmed our presentation, and later, I watched my presentation with our teacher. How I imaged in my mind and how I appeared was different. I could prepare better in the preparation sessions. The preparation of a poster for poster session was not as straightforward as the oral session. It is another chance for explaining my research, but there was a conflict in me. Is the poster should be more in detail for the background or the result? The more various audience might come, but the more chance for me to explain personally to each of them. I decided to take a balance: both background and the result. For my decision, my fellow students gave me comments and I could improve.

On the first day of symposium, we left Tokyo early in the morning, and we already sitting in the hall to hear the opening statement in the afternoon. Before the opening ceremony started, my colleague and I explored the architecture in the university with our professor. We didn't have much time, but although, astonishing architecture was in the Ewha Women's University. After the first professor sessions, we together went to have dinner. Dinner was Korean dishes, whose main is a grill. Students from Ewha seated next to me, and she told me she is math major. We together enjoyed talking and sharing experiences in

universities. The second day is one of the main part for me: oral sessions. As I wrote above, I prepared fully for the oral session but I was still anxious. Happily, I could talk what I want in front of my warm audience, and at least, I felt like I could convey the main part of my research. The third day was poster session, which was less nervous, but still had to think a lot before I went to the venue. Is my poster clear enough? Does it look good? Is my research interesting for my audiences? However, as a result, I was worrying too much. I felt like I could tell almost everything I wanted. Also, it was stipulating to hear my fellow students' explanation, which I thought two hours for posters is too short.

I was lucky enough this year to get a chance to experience the chair of the oral session. First, I noticed that a chair has a different perspective from audiences and speakers. As a speaker, I focused on conveying the information. As an audience, I focused on understanding something entirely new in front of me. However, as a chair, I focused on the overall flow of the session: I listened to the speaker, I cared about time, and I thought what the question would be in case everybody on the floor is too shy to raise their hand. Fortunately, professors in our session were eager to ask questions to our speakers, so I had to care more about time.

Last, but not the least, thing I should mention here is my new fellows who I met in this symposium. My new friends are super enthusiastic to their research and they have interesting perspectives. I realized that each one has own vision to see this world: some see as a mathematician, other see as an informatician, or maybe as an architect. We share our experience not only of telling about own research, but also we together tried to do something different from what we did yesterday. Now I know, participation to the symposium worth more than I imagined.